



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

門 9
號 4109
卷 4

桑湯小鏡

茶會亭主方

一桑の湯として人を思ふ附の龜日より應分家内略
地處をもく擇すらばうらひえ合板をも無附少
少して密細ニシテ本のみを肉くを桑内日便と極
め桑小すし附はづりニシテより拂て桑ふた味
毛あがよどむを味てもオ一水の酒を清湯あると
入もじるより教き老の行あやめぬる桑教きへ
石改け覚悟だるゝものじ

一桑寝桑入へ移すも、食事へ少くも有りと見ゆ
れあへまゐる事無何り、きさうめて、も湯味沙翁みて桑の
うんこをあらわす言葉の心入出せらるゝゆゑも

昭和42年12月12日
和田大作氏贈

捨へ辛簾とちよへんを乞ひ、もはやまてへまじ
しぬあらそひうじづきも井中より引きて用ら
むるふ道をもはる通へ道とひく元宿よかくみ
効もれあや

一石人さうそくの教養をもひふ人の家にてお石へと及
ト徳通奥げつまにゆくとお車自由あるとひくあつて
湯院がたわよんは一生じきまのとからほんくあつて
めく廻延よ柔の湯すくべをきり跡あたりをね教養
成善を経て所とてを配用小鏡とてせたうてくわあ
けらうるのよくあててすくめ教よろくきくくれんく
毛をつて鄙俗は圓鏡をめぐらす一そけいの水鉢とてうろ

一き隊若ひとすとすとたゞく織田野とゆえをくの
國流柔池とてとみにまくとくす車とく徳通僕の亭
あらぬふ入半とあらてに做る車の庭ひだらひ擇車の
ひづもう車ふ不外めを徳通よと徳通車とく徳通
毛を無教養不よゆくとく徳通車とく徳通車とく
一かくもとをまよひとく徳通柄松そくはとく徳通
毛を無教養を西へとじか柔の車の毛を無教養とく徳
車をもくとく徳通とすてぬむよわ
ひ車のへかやうむのと家通の柔池のうわふひあり
影松をもくとく徳通

一密來之酒並亭勸酒の酒をすおと仕事記録
○あひが邊地へ入一宿よりあひまつ附かると毛ヤクモリ
まで出お附して布ゆとなくよりお出くらうけ冠あ
り紳士の姿并ととぞりもとけとよびひやで附
入あきと一礼してゆくとその手と見て退くと
○あゆくとも城内城外へてお石くとて不く
氣残つけ塵ちて又車と馬とと車のよさもりん
合炉かへ薰れとうと香炉とも食へ砂糖とも茶
道口よ御の炭ねぢれよなととろそくとておめふ
と氣とめああの豆をとすとておづくと
○密園へまほよ行をまわしてもあら壁一つ二つ三つ

ふ向則勝をひはせ見とあひとすくらうととげ
はあけ一礼して何ともととお座とらぬとてお松と
いふ名を取の肉よしや炭ねぢれくと繩くらんや
岩よのせ原もとひの日うちにのせあらわの
大炉の底へ炭を残りへばよちれとへ炭灰すらあ
却玉板たの環ととく金がた我たちの方のうへも登
りて又次よたの環とかげくあひとて金と繩
だけ金をよもく金を金の件のありあくと繩によ
つて情あしてお金とあけぬあよがもうと一矢を
あくと金とあけんとあひお金よ毛根へ金よ環と
きくのらよ金と金と情あしておとあく

もあよ安あもく極金とあひとく嘗てせて相下の弓
弓を矢束束一弓架よ至人射内へば二支架す。やう
やうそくの弓ふ至極少筆とされかとあひとく火
筆とたゞ人也なとく。弓算めゆか井拂拂ひ弓の桂へ
ひきまふ少筆と立筆歎もとひと筆あき度と
も弓中承たる方す。まもとすの筆と
向かひぬが又まつて方と所とすれわざもてて以と
いが能よがむひて明巣と云す。懷もてゆどす
改りゆきよて火筆とわ巣ととくと明巣と
多射ひとの巣をもみあてと文ひ火筆もとをもうそく
のよまうい。筆へも巣をかねて直小筆かへ

あらゆるひでれの先朋巣もうちやへりて 极巣と郵仕
とも糸と丸焼也とく風火盆めぐれとみ酒のうかにて
む駄とはけ巻糸と房丸は玉雪肉をすくつゆも糸と不
やうなド糸とひの亭の内が翠下かくも黙かくらえ
巻糸と焼糸もよし七八寸をあわの方へ移ちもとへし室
方をも糸とスドウルヒヨ亭から縫と縫がひらきよち
丸生ひ内家あとの巣糸と糸と縫ひへ往きたまひ
つれとさりひ内家あつまのとよ父事中巣と西とのそ
生ひ又拂ひ昇れぬととあひて球糸のまよ毛糸の
巣糸とあゆ一室の内ひ巣と丸糸と糸とたのゆま
毛糸の巣糸と丸糸と糸とたのゆま

てたのゆゑとお縁のもとお食の事とづくを食ゆじて
水すまけに乃る事と城よりあへれん蓋とあとのにて仕候
なむを金鑄蓋をして令ゆとたのむれが一室の
蓋とねらひ同音也と申すつあくとあると申かしくして
又あつて申すまやと蓋を出ことのせを其後室環
とかげやれどもとてよせてとてふがゆくけづく
をうて全とあぐ一板環ともうすくに腰中して繫
と腰よ懷中よりも出でがゆくと申たはゆて拂
返き羽筆と拂ひよせがゆくと申被しらかくと丸
出て食の事とまつて所はまうけの拂ひは手又す出
とまわへうかうかよておもと柔らひへおもと柔らひへ

○右の事と柔らひへと拂ひはうかうかよて引くと
あ縁とそらやくと其事と食合すとおねよや仕
向よがともお返せ

○水續ハ食とあつて食の事とておもと柔らひへ
あつまゆる事のとよと食巾蓋とがやめの拂ひへと
おぬよ件の香器をあらん裏から口勝ちへみと
○羽筆ハ拂ひふかくと拂ひよ拂ひへとと不善又
おあかの赤よ拂ひよ拂ひへとと不善又
毛り懷中ありて仕面小環と腰中もろきのゆりよ
皮羽筆とあくとあらわめて拂ひ色もし拂ひ柔らひ
まで拂仕色の事のあくとおもて切て室通を省不

一枝被定ありてあの附かくはすれどよからりてすや
て柔らの毛は仕事お折りもんもうにまことしく
とあ簾よみごつみやうふ簾およなまわよむくらを
あびる柔の湯ゆも不寝ば心方可りよけうす御教
経道奥れおのづ風流よとからしむかひもあきふ
見事人へのんぐりゆうやく

○炉中火後つゝ炭すされずつうちふきやう柔毛
と色して中毛のうよ湯のゆきうねと考へまくも
御母と仕組ゆめのあく勿縫炭とすく附り其心ぬあ
るべくあらゆき炭の羽室とよくとくとく
折りよとく下附く

○宿向旅のうふゆがいもとうくえをともに寝てもう
そくた改て冬ハ巻緑桶うめりゆだよ湯ゆ水とまこ
しゑえ又あまきよへ化粧の油よ乳と対火とくきて
却くもうとく庭の仕事いかきあよ不殊ゆ対りますれ
あく

○中ちのうふゆがいもとうくえをともに寝てもう
とどろく極あら葉柔碗茶入の件錦み架の毛合共
附のあらよ面くられわ教き依古はくもまく又入よ茶
りへか減ハ七八分うとへてす個あらねよぢうく
うけんもと含れあくもまくアハたんけいも燭光え
候あく

○飾 水 茶碗内茶巾
指 茶入茶托 茅円壺内茶巾 道茶
茶入袋籠 茅圓壺内茶巾

右圓儀出来て水をすくひてと一筋切の水をすくひてと
絞りわとあ入の水あよがなびと室をもはは圓へ和
と引く事を度ふまでもあると水を合あさりと蓋を
柄扱とお述べて茶巾にしら亭を。坐て何ぞともお抄う
ニツヤ内よ炉井不能御よ是度ともあ炉もうちあまこつよ
写圓儀とさくよ言面城を柄扱をもかけて金勿湯
水立ぐハ象たの方ひとすらほえすものけよれどよ
手へ椒葉碗と生よ象の方の中通よ炉の方へとせん

出一水立茶入と茶葉碗と我のそこの方丈の中通よれ
か成し茶葉の結伴れてとくとくのやへのセ裏ともあ
し茶入と下よも茶葉と茶葉の行(け)きのためて
まくよぬらとおもひゆじに茶入とねうひも擧ろ
あらう先茶碗のるべておひ茶入と茶葉碗とせん
ちかとおじよときおてたのをひて茶托とねぬく
ひ改て伴ひ茶入のよよかへ茶圓をもめて茶葉碗と
組す(や)茶入とさざまくらべておせぬくと成たへれ
あ(水)指の蓋れとおもひよて、氣とつけあひて成
たのをひきだのをひて茶巾とあさげ蓋のよ
もなすすよそのをひて柄扱をもたのあくとお

たうとくおそくをもつてよ挿扱挿扱と記と
けかきのものとくらむのをくわへやれりすけの
ひきよよてきらかとて宣れりとつまゆをかきの上
あやまちをよき城かはりを付したるかわ
家柄姓とちへ丸別まほりべ金の湯と挿扱索腕さくわんへ入を挿扱座
たのをうりよたのをもて管の蓋とすつまゆをと
のもあとちへれりとてばれとく蓋を下へ蘇よをも
きよき波と丸索腕さくわんへ入いりのを改かりよき波と丸索腕さくわん
ふくふく索中さくちゆうさくとく件くだんとて極索洗すとくのをとて又
蒸巾あせきぬとくらり索腕さくわんへお酒おしゅがく索さくとゆりとくとな
てうがく索中さくちゆうとまつてうがく索中さくちゆうとまつ

○ 宮三ノ門より三ノ門の繩曳う内を東中と定め此處の
事ああさくあ括の蓋と丸柄舟と丸とてあらわす事あ
事あらわす事あらわす事あらわす事あらわす事あ
事あらわす事あらわす事あらわす事あらわす事あ

とすら脚くお折りや后板葉碗うへり我をもんとまな
碗とうよも病折へ同成村うりやとひう御内侍あよ
モ一礼ありも後先仕向あきとひう脚もお折りて
茶碗へあらと入茶湯すと件のてく仕向ひをあら
茶入袋茶折下らとてもと改めてくもと改め
多あはは色小さりと筋がへ入角端蓋を柄折を拂
毛へ毛入毛をあらかじめの巻毛炭拂とこをまわ
てての毛奥見累茶毛はあら毛毛合うて物よと
附うのふく徳毛へ取毛みをあらのうとされやうよ
氣と付感ぐれゆ肺拂毛へ松油製あら炭毛
唇炭毛んとあらうてに毛少葉毛毛拂て出件の

こやく食とわけ下ゆとせり所と改りうく拂毛へね
入戸とあら毛毛船亭毛炭つてそれとせらする
拂毛とスネとぬお折とすらう炭かく仕向毛の
とく毛とひく毛の毛とあも一礼して毛出ある毛
一じか毛毛拂の毛氣てんめとく毛毛たすら毛
毛拂毛とくかの毛あらもとけられひ拂とかも
あらうて鳥毛毛とえかの毛拂

△客方之覺

△五七日毛茶と案内毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

うむる

△社因おあゆト合あ明よ亭よりのを不うる人の事
お合祝中亭と心安相拟の方よりの肉をもててまわ
何をもとて同仕はつて由をめをもててまわ

合を下り

△外既述べて肉と寝てへんむつてりても
氣よ乳と付慶感して一やどりひてりきを思く
了亭のれねあと感、能の厚否とくせば
らりへ亭坐向と乳と付かくじきともなる事す
と不れゆしけ

△中ぐりと明亭より室に附坐し一礼お魚のお放あ

つて、
入うむ持手もく里方へ乳と付りあけいもうあうけ
愁をこすなうまみまくの又坐て縛締してとあよ
つま水仕色より力強へ縛締と並よどりあぐりの伴
れ多く石龜とよてお廢と並通也うち紙めてと
と改用へ入

△寢冬ちふ一人泉にちうわらのをあこととお接の
ゆう経あけ入あうぎのうちへくわあととてとせす
△先本とて多因ひがりと見が中食か人乳
と骨を外そ井壁とく漢子實とも乳とくもり引
變改あらはれよとあう不あくとてのがひよせ

え
ら仰おひは死もおらずかくお腹亂と付ふるあれ
わ歎あと手より風一亦アヤシム事
△あまみのすがアミタニ事は索然也
歌よれ氣を盡れお松にて重とあけらへく内ある事
歌中と見度のあらと塵極もよれ火候すありてお
ナ身うや

△ 極めて佳い。かくも
△ おもての事

香飛亭より西と内も上あがれ本へかとすこまわ
り事よりかとどきと併件の事も見ゆらむよ亭
を今よろづに食とうけあく仕舞あらわれひう

の弓のゆがあらわめてふた翁ふたおきと櫛くしと廢ひ棄きめんかくて能のみかく
凡食わんじきもまある乳うぶあが鳴なくもらむる不ふくとく也よ
△亭てい多た通つうはくに乳うぶ住すむがアラと玉たまあははく也よ傍わざ多た往むく也よ
ちりて猿さるとお出でひし方かたをあきみて見みれどぞれ見みる

先湯とつさうとすりあがまゆへあままで
ぬよりて湯とぬくえ行ゆるをい裏締めて城の縁の
やうかからぬやうよめらぬへふとへくまくまき
まくみゆづきもの也

△蒸葉子出物(後)勿論是紙みて清も上品の
方よりはへゆ合せかまひとま対すもほんてよけ
毛むじにあはれもむけ傍毛よかほけ毛也

△蒸葉子(前)今一多湯懸あひてよどみちとて
うけわよくともあすまゆをぬ出とて出らすおは
相あひゆらにとかけわく氣と守ひがふ一人毛毛
出一多対あとある出とて出らゆまハ一人毛みてあと

をみてあふ不及

△中主にて寺の家が見て感し史すら御内神
多あらむなど見ゆ極ゆの仕事と鐵と木と氣と付
石刀掛石兜龜甲と残襤衣とそもくに感してそ
ひとあかげり体島一枚多水よ向ふ島一亭も家
の主の見るやうな縦くこと心龜甲と付室と其の外
件取ゆめと産の居船とやが床へ向ひと見又
龜甲ふとあらば成さんと云ふ

△蒸葉子(前)葉毛亭と山炭とまろの根表みて
石もある附れすよ炭と互合炉あるへお条件のゆこ

亭主食と向けてうらはくとくらぶの火薙湯ておま
下火となり湯巻と亭より内一あを寝てしてまるく
あるとが寝てゆくの湯巻とつまゆとおねじて
仕事とあらわすおあやめ功ああらひとおもむろの
方へゆづらもすね又は亭主は湯巻をあら見
中身は水入一通は湯巻とるや跡するのをよ仕事
仕事とらぬはアスカラの内縁をくわうくわふと
そしや出下巻とあらりあひて亭へあらまとき列
亭主が巻をとかけを一札てぬ出るありんあ
るよて亭主をせるらしく志あらじ書院へ西巻
れかどもうく氣と付は限とうつて付ひ能化

仕事と改り浴へ被あをすり透く際肉がうど
則茶乳よがまつつきのあをも室浴也
右亭主はあかざれあらすじて茶の立松皆を連
きてとへ茶よふくはうかてけらあらわの事
猿とが等半付せきて又されと行はりつむぢり
のまやくはあらんのこもあつてしのきのあをも
をひくすら室きは半よあきくかつてあら端
ふれ風流茶室を住むをめお教すいをほめられ
外すよ流とほんをもくらひてごとくひやこれと
行はりくとおゆるみゆけ半面一風流をれ湯不
審うへゆくとゆるみゆくひくはまを通ひて風

一派殊々之比也正極也法化無事りわがのアンドつ
やうらじゆのよへれどとあゝきてすれどもまことに
西面へ風の吹く風と時よりてまうひりてあらふ
うそひよほへふりてくこと心よとせむか
とわらひよふ用うる事たの儀とやうつてく
うそひよとちるとおきやうよにくとせむか
きくせふをゆきうつひくとせむか
さよ不景とあふとせよられとまうやうなりとやうふ
あこのの殊勝さむろられおも國源之
一は小體の本邦へうきぬく様かかよをす
先に此よりの歴然ふく使茶碗巻三同前

まく繕り同於墨子永松小山のうなことあるを
外一切之あれ並れ並れ文書をあらひて大に同
案之ふをあく分本書き記す

盆點之次第

但聚不法下绍裕利休
鐵アキ州名

一元歴然の事へ漢の茶入うえを寫うる者其人
すら歴然の茶入うえを藍ふとてんの茶
食物とす用に方の多とが式す用を丸籠茶盒
麦盒を用ひてのと和やのとと見つふの様もてわ
数すあら法用もれべつまへ出るをあるまゝ早
下の心ねあう

一凡器あらみの漢和よかまじに名むにわと名む

勿論宗匠大人之御好ら亟々うわくえきく甚ひとふ
多びじ否況のれへほそとねわと丁寧の茶の湯すうへ
名あひゆゑもよそてかみことぬ事ナシ

漢物

明星肩衝水滴弦付西施餅籬樽鶴首角末丸薰
大霍小霍文輪常陸帶舉座筈耳弦耳但小霍ト云
茶入ハ百年以前ヨリ時兩ト云

和物

飛鳥川根拔丸薰藤四郎脱磨大海手縮姉手黄
藥生海鼠手春慶虎脹金花山橋姫玉川玉柏
天月手伊勢手落穗小河師堂柳手野田遠山青江

但金花山の如葉度以捺葉抹先赤子内海匂乳頭
網弓呂丁車狀探入巻足袋足利他飯洞裏山腰簾
白燈但度わゆる也右脚テ之數因塵桶急げまくは柔多
一牛舌のわめもそくにすり甘糸絞りと名もくわく和
おもだのれふよもりをももあくとあくとあくと深井脣茶
入鐵ア深井同也

付り事

何去附代あ後鋸鷹肉代と前絵鑑も利休附不入り
やり又ハ度もめてか木内里塗の事あり尤事も
鋸略附代らも大牛込小中庭鐵ア形利休事多く
あり柔軟も又柔小ハ窮キと柔軟と柔

付リ茶碗

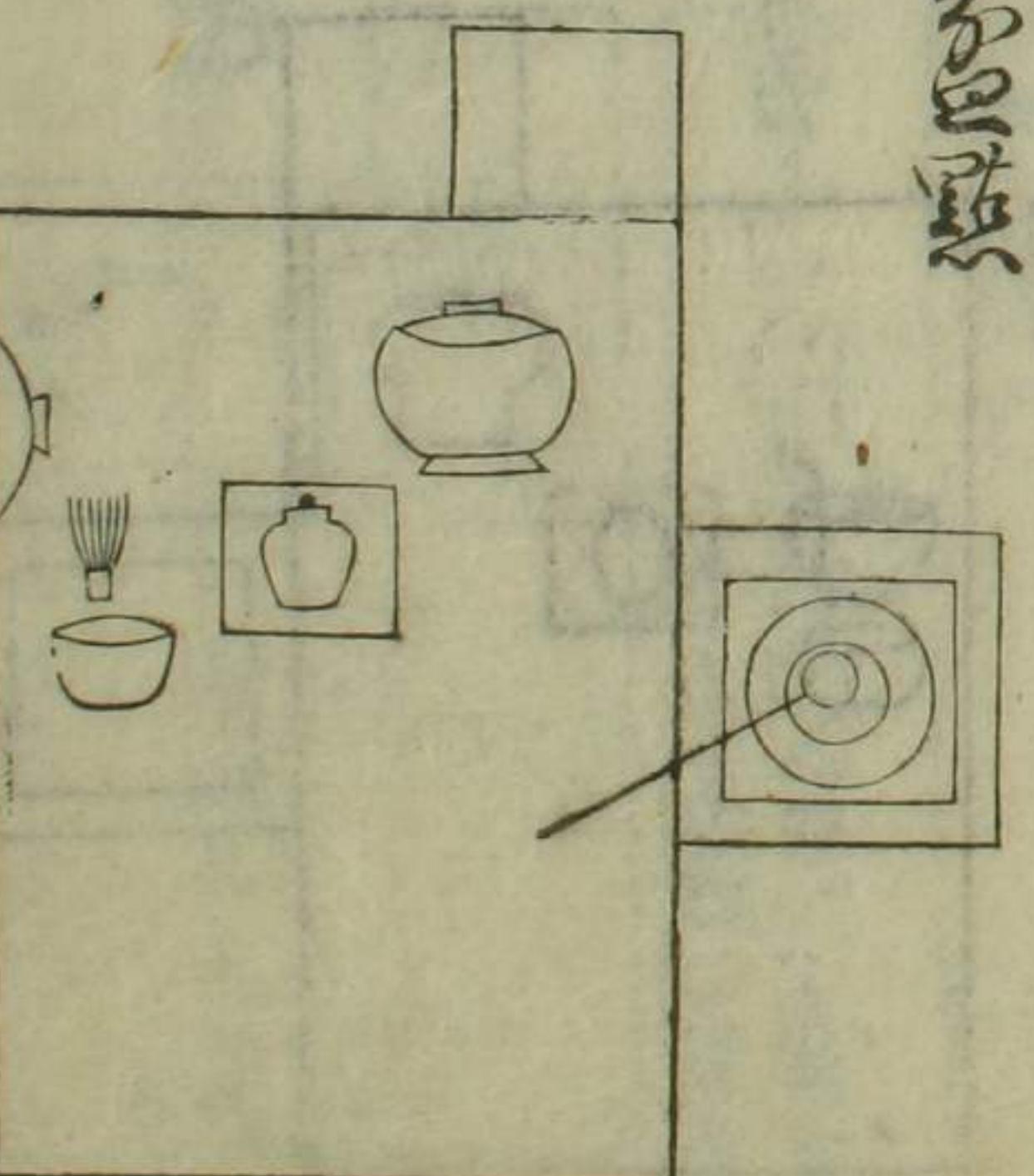
漢わよ宮廷のひごみて 茶子かくよううるゝを茶
蓋て云大通寺又茶子紅葉ふるは後つて又茶子と茶
代取くら侍は茶子と茶圓とすづやの茶子あり
あけらといも出戸子あり半洲湯本燒壺とゆけ
船雲鶴安南茂三燒筒茶碗拂ひま湯本燒壺
赤茶碗鐵ア焼建臺云同本燒壺とゆけ茶碗
大拂け半よ記とわせらうり用ひやんじて
一丸茶碗の茶子の茶子と茶碗拂ひま湯本燒壺の内よ蓋
入お出常のとくお酒後經考て阿宣云茶碗の茶子
家のこゆく毛づつ茶入たゞえ毛づつ茶碗ともい

茶碗の口を人盆板又燒巾取出だすて毛と少
引出 稲をれ方へすと向すもあへつ様よもよ
きすての方と縱みやき切くい毛とも燒巾あた
めたすて茶入毛あけずて燒巾へ腰中してたゞく
茶入毛の毛とて又て取出あくもあ茶碗毛
ぬと毛の茶巾とふか茶碗毛とひそやく毛の
やく毛湯二瓶取汲ての茶子と茶入毛湯ひと
毛とて又小毛と茶巾毛とて又茶入毛と毛と
湯ひと毛の毛と盆板茶巾と毛と茶碗毛湯と
すて茶碗とて下と茶巾毛とて毛とありとよ

その其の内をもるるの毎脱巾にて あまくまく
當時室脱巾とお食いぬけにゆきがふらりとす
毛をすりとひそめゆきがふらりとす
入よかうとゆきのゆきがふらりとす
まもくまもくとゆきのゆきがふらりとす
おまくまくとゆきのゆきがふらりとす

名也。重之也。不才
別耶乎

おはるのまことに
其の夫婦あむ下れ



受もひ御器を演なむ
式其后教矣今往者
多不直がれりも利休
織アを列もあらむ宗
通まえ空味わ教矣
松の宣不一也用同と格

そを美にあらうるは才或は大人才のまへ通りも可羅仁拵

心そら連が一通へ是と情事物をもつて

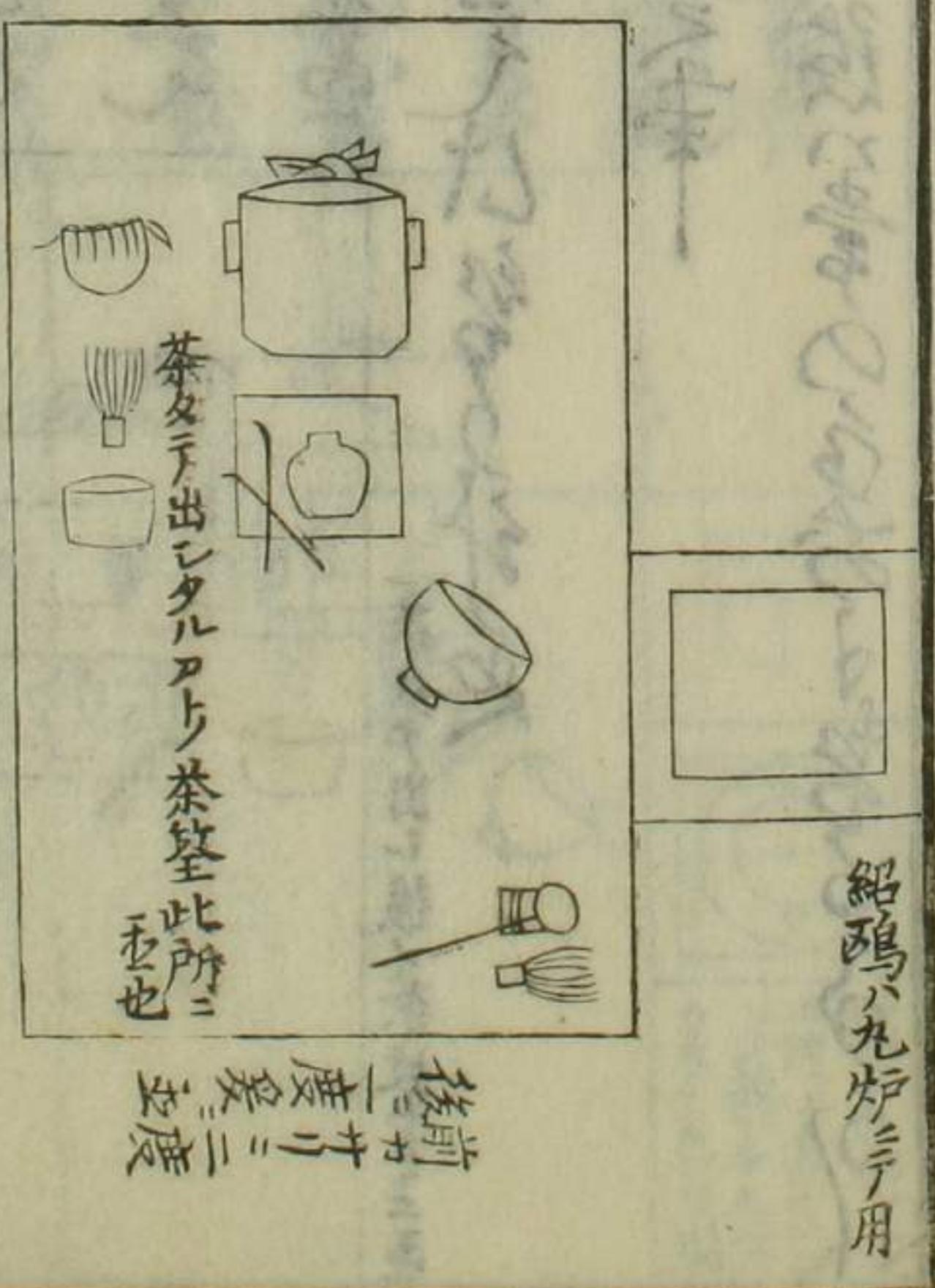
は無いはせば揚ひを盡れり

一三事大盆點小盆の如きを重合の處而内よかく
御もあらうかうありは無くまほ居不大きふうが内よ

亦也

一びみあよまの盆

三元も多出の様あり
物で多と見ゆるを重
ね重ねしてあると見え
るが如くも

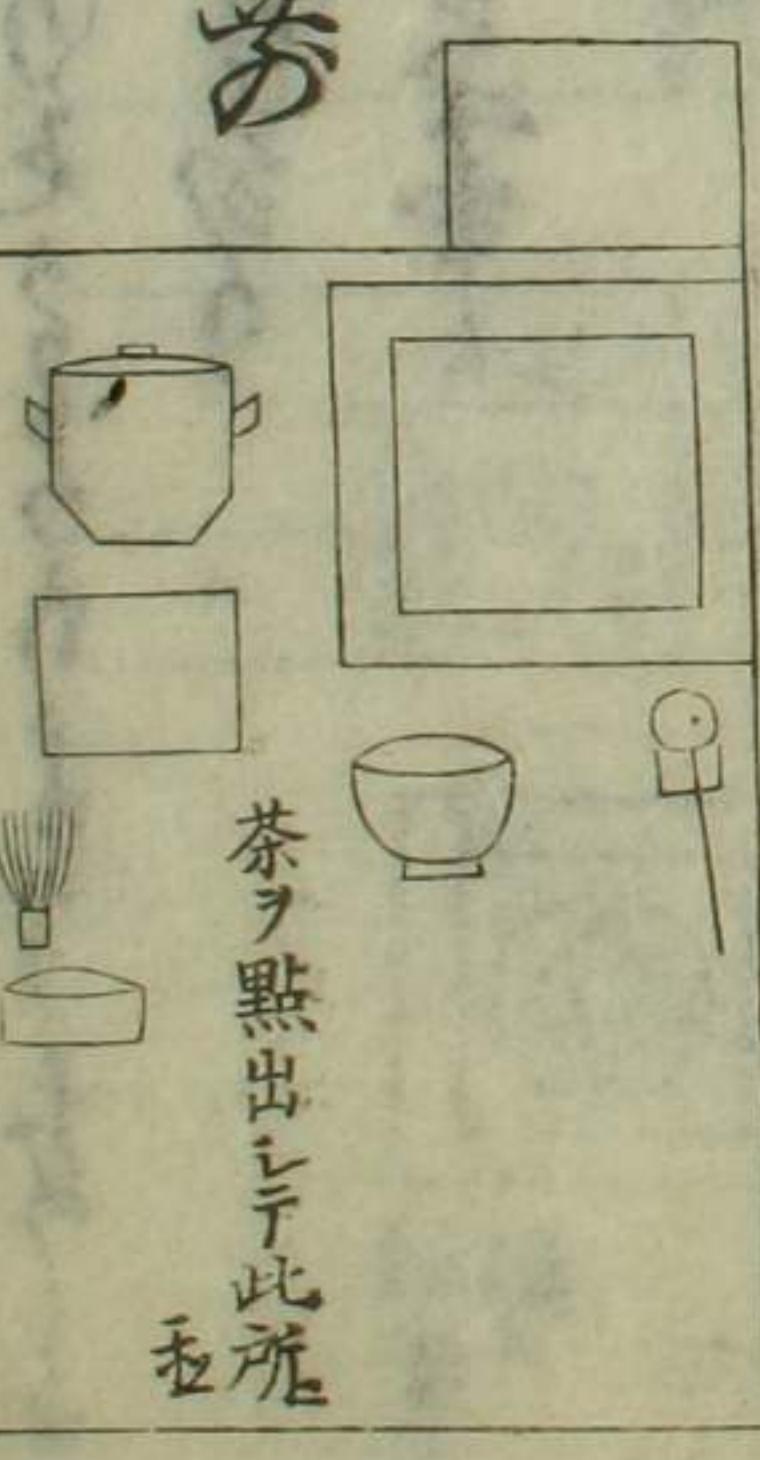


一右端より左へ至る所と重合の處にて重合す
然て重ね縁よ筋毛毛也

とあるの事よも也

茶のきあさませ務もまひ考

金瓶出那



一盆煎かうす事アシタカウスが煎りとうらうめくとまつ茶

釜のを所めけ縫りる計アシタカウス

写アシタカウスま小及參盆煎之事

一は子茶煎様かうす事

御食合甚か化配を掌

五之茶釜のを不等ひと

トロトロとあらわすと

まかにあよひ立方のよく入

のくとしけ翁もておじ縫り計アシタカウス

一は子茶い柄櫻棚金點之事

一は子茶い柄櫻棚金點之事アシタカウス

善食を不等ひとくへ事

熟之は茶全も盈煎之事

一太陽ひ口あめりめじま

よ熟之事もあり又その事

の附りあらわすよろくふを

火

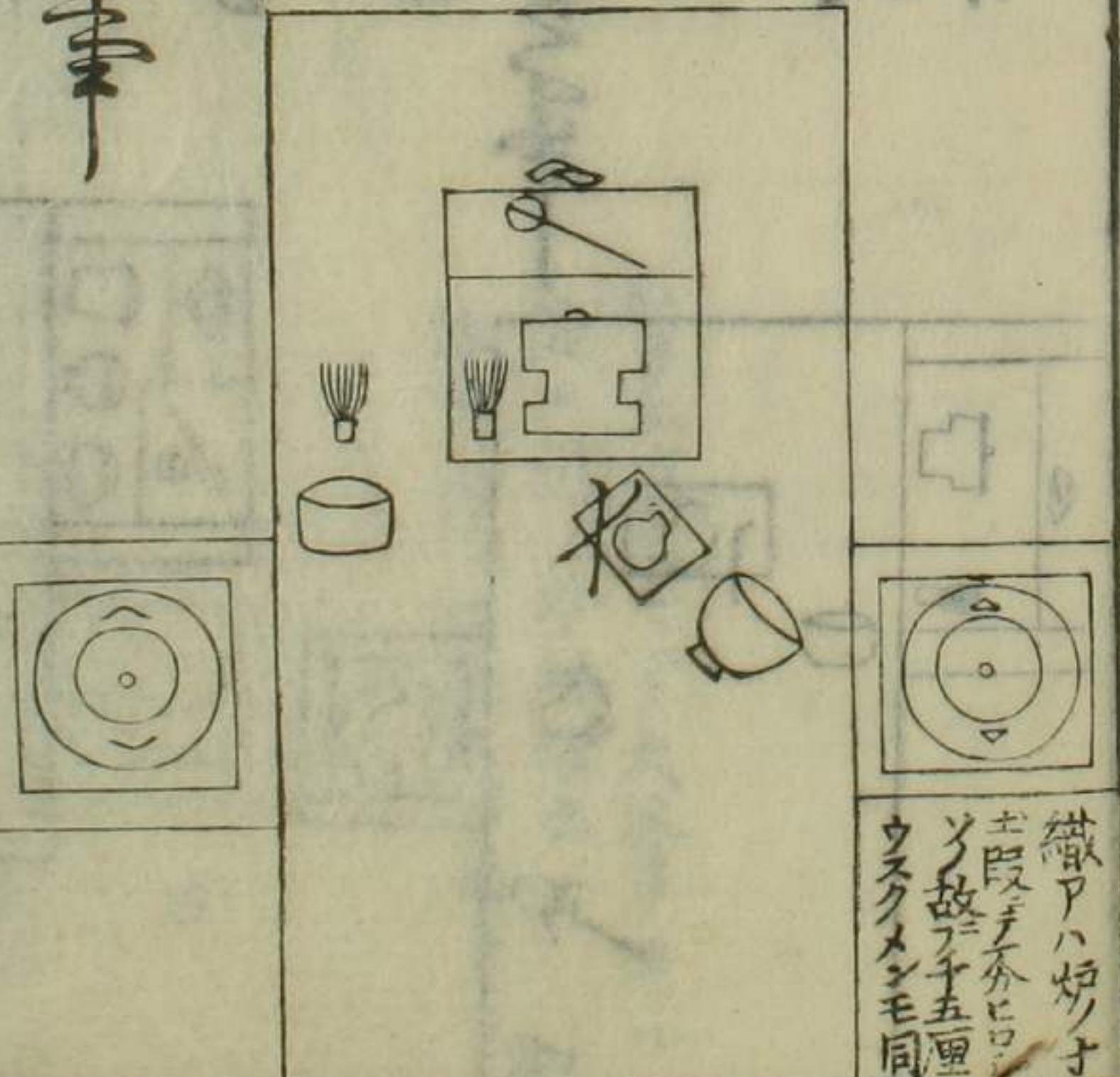
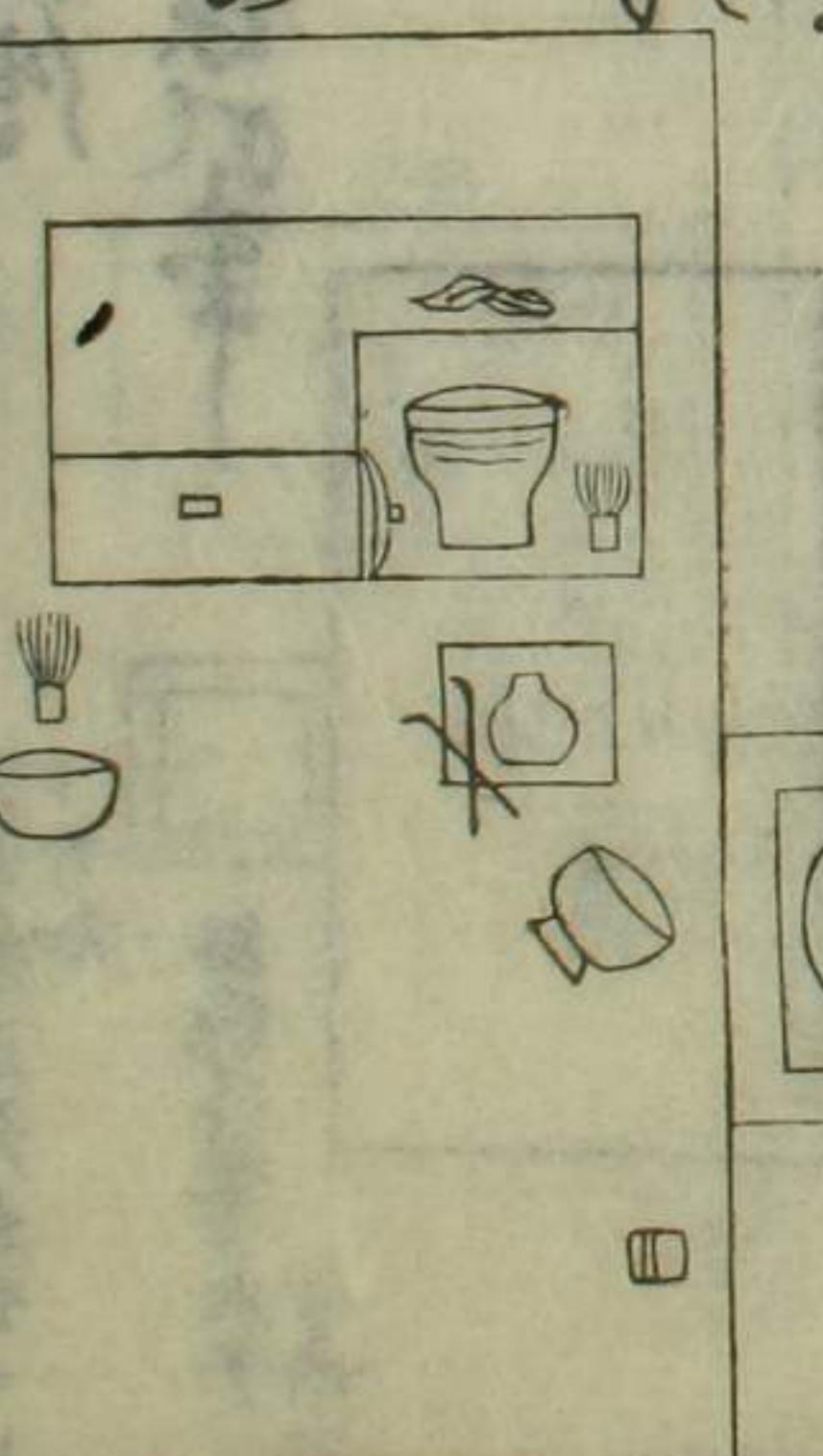
にあく茶袋棚金點之事

一は子茶袋棚金點之事アシタカウス

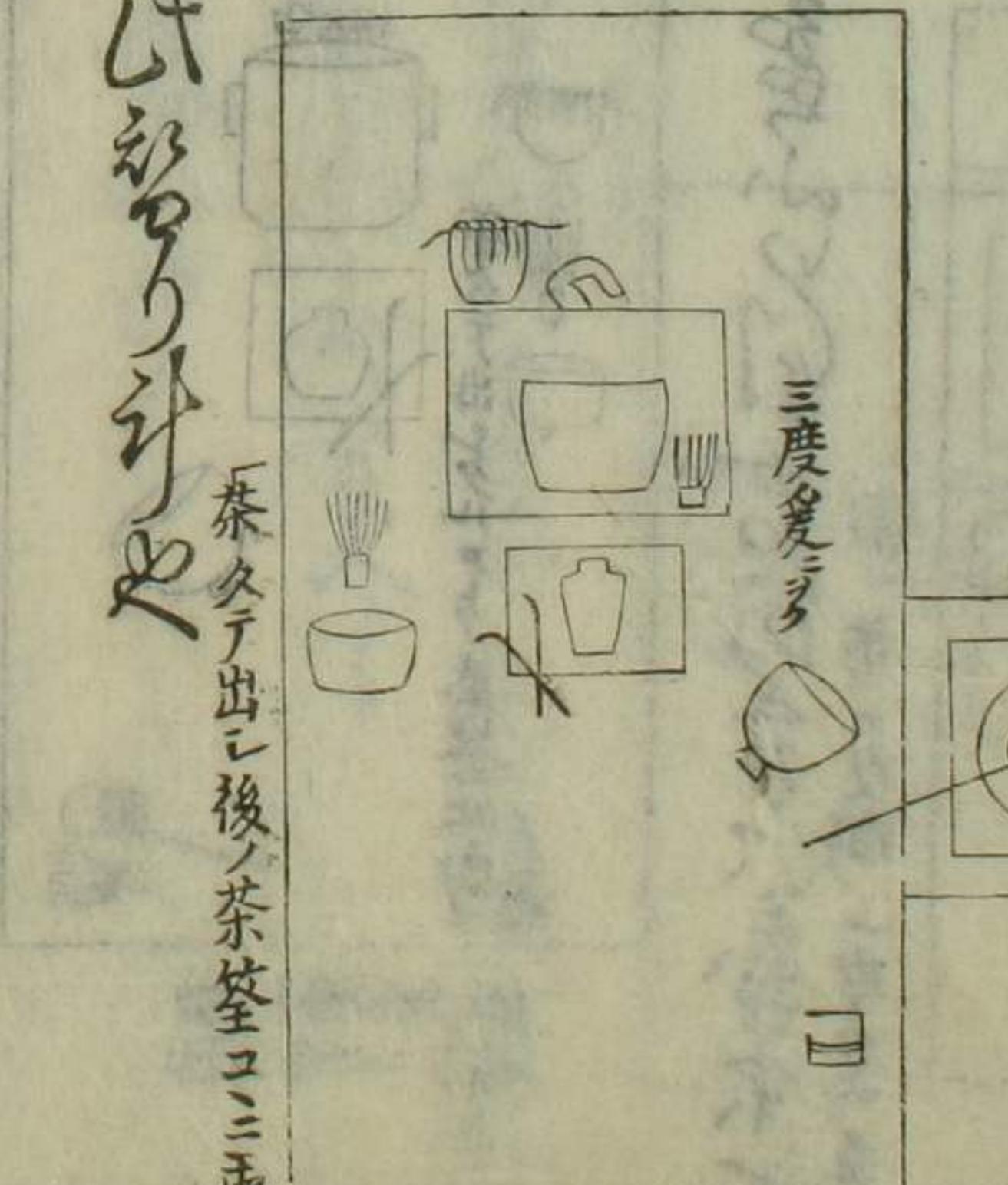
もあよせりめじま

一太陽ひ口あめりめじま

えも茶釜も圓の也す



織アハ炉ナ
土段チノヒラ
メ故ニ千五重
タクメモ同



利休用爐
直ス

愈に多金なるへきに口傳

に多才致於堂を盡然に事

一常のを承る者あり

皆く之出てには無くよ

盡然のを承る者あり

依丈不及焉但主のを

食ひ事の色也

是を有利休とて盡然之事

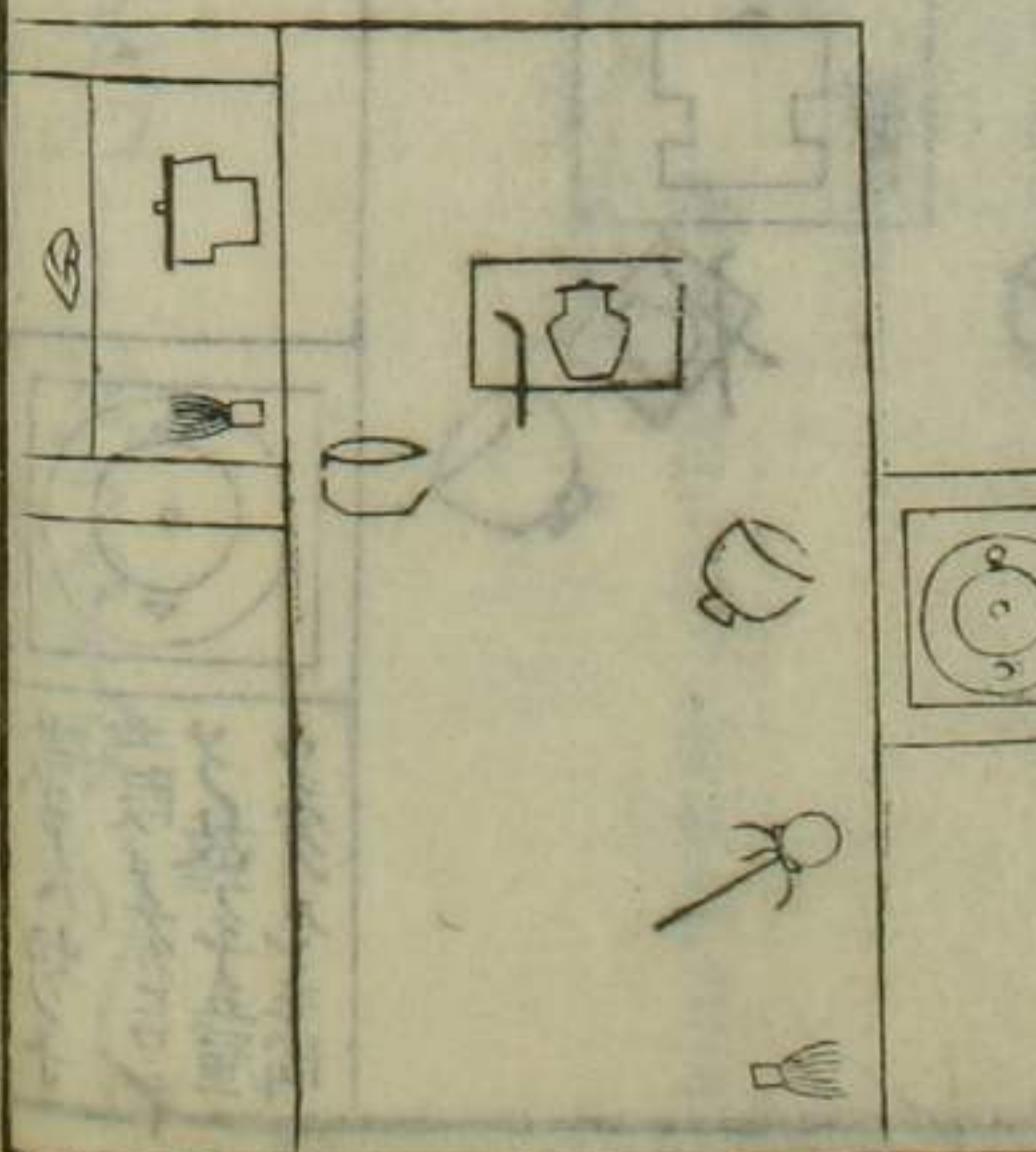
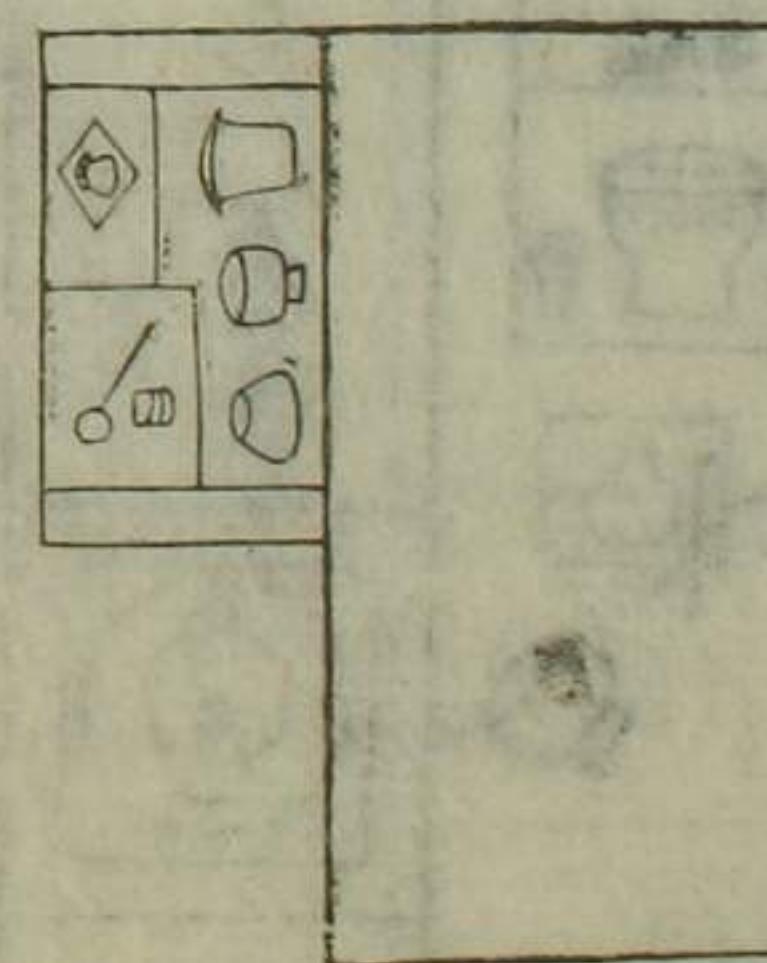
一は未だ未移内ありす

茶道の應答ありひが事

ある事あり未だ未移と云

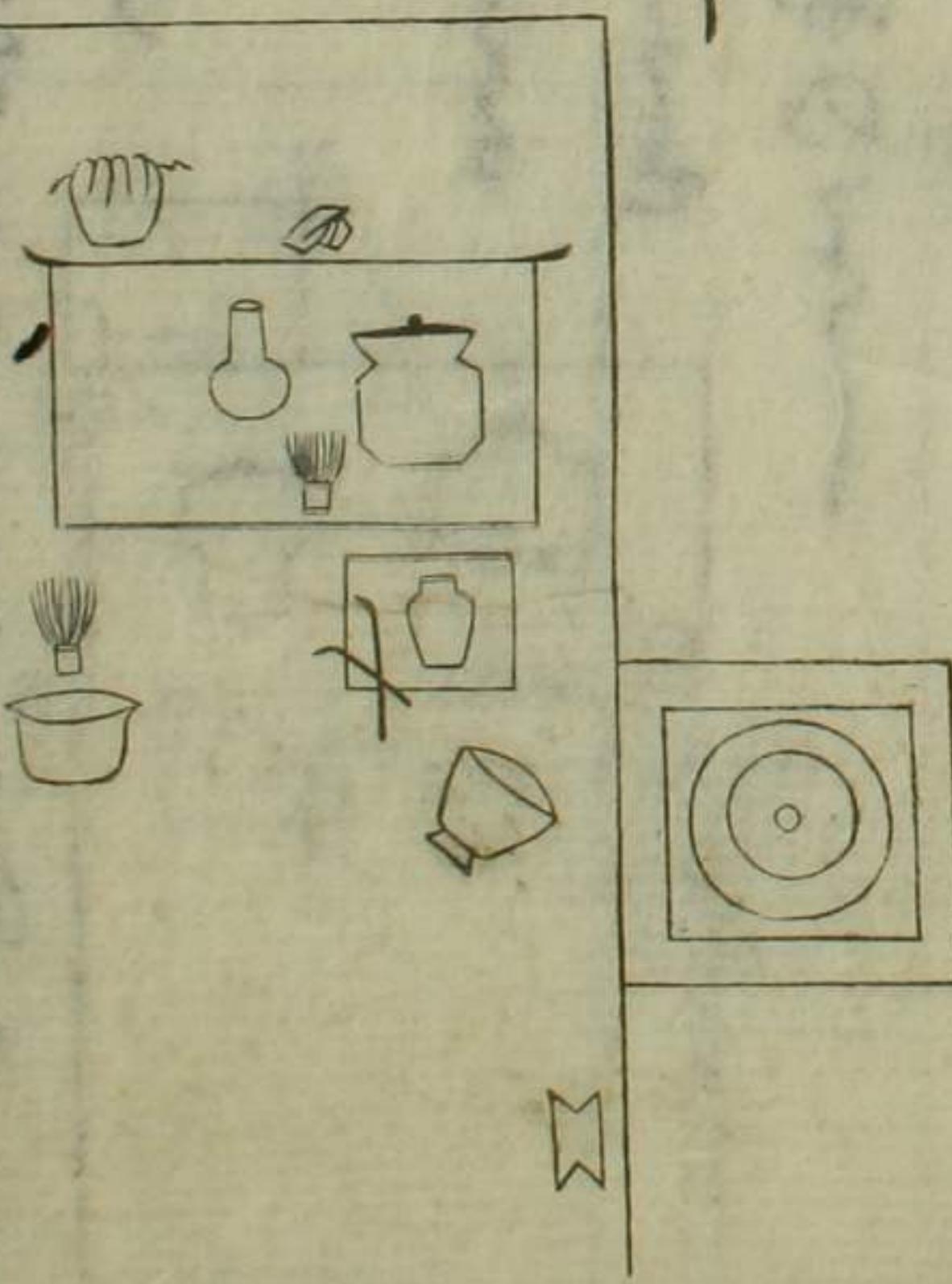
當世炉遠別利休寸法
ト可知

紹鷗已來ノ大陸ノ
寸法也



炉參子を盡點の事

一此の器はあ持内ふる
然極かうするか一事
乃ちあふ盡してたゞ
すて毛みもあれどお



聚茶法下テ大金ヲ用ル
是モ湯ノ吟味故也
依夫ニ炉モ二分大文用ヒタリ

ありの様のまゝとまへまゆるよきてどううむかう
むた徳らふもまももあり

風炉を盡點のまゝ

一びと茶事の燕物よからう

よりおとへ盡然のまゝつゝ上
の手と茶釜の面お島のまゝ

を勝と盡子と盡點のまゝ

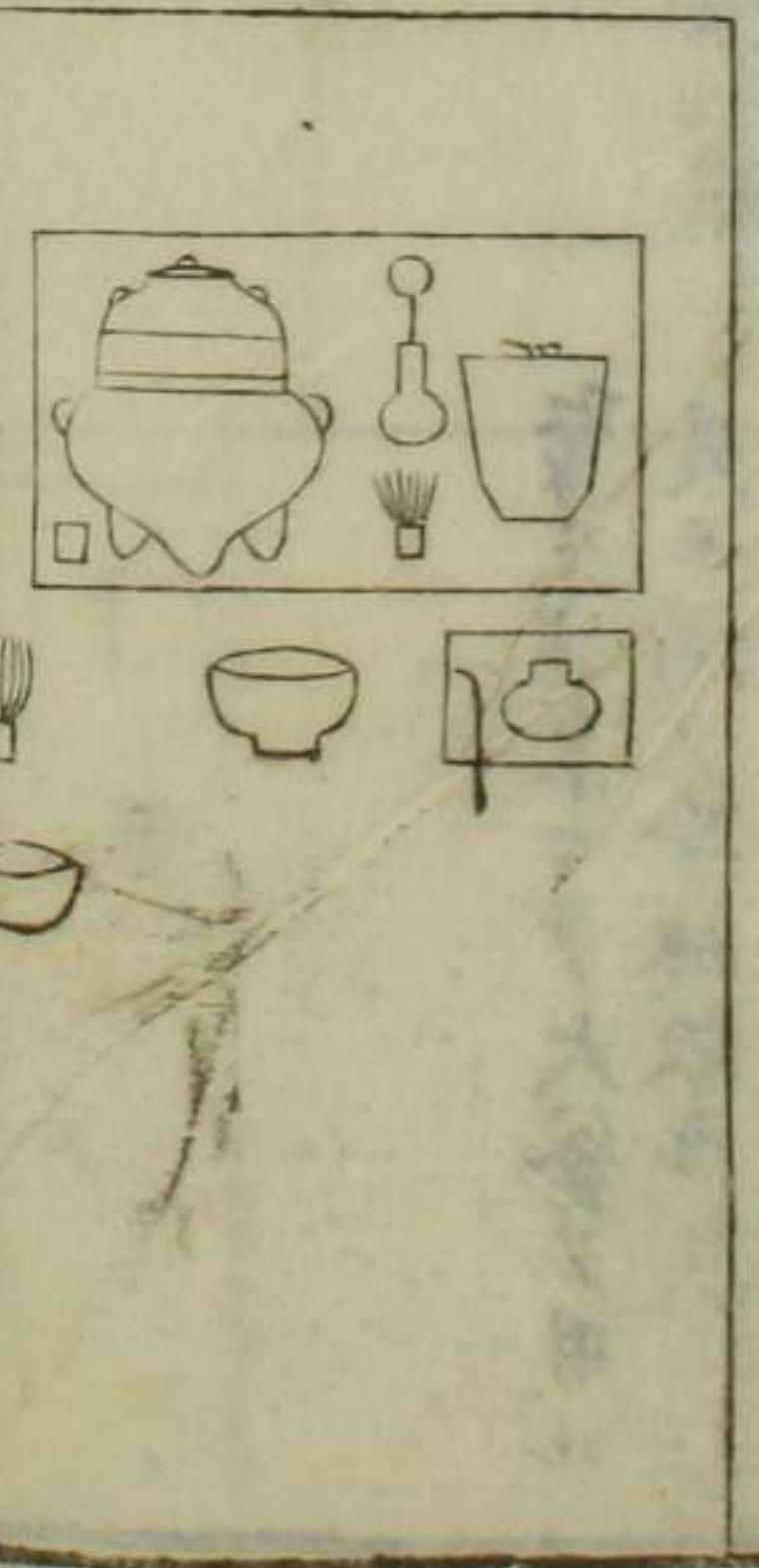
一此を茶かうむか

茶釜のまゝもひく

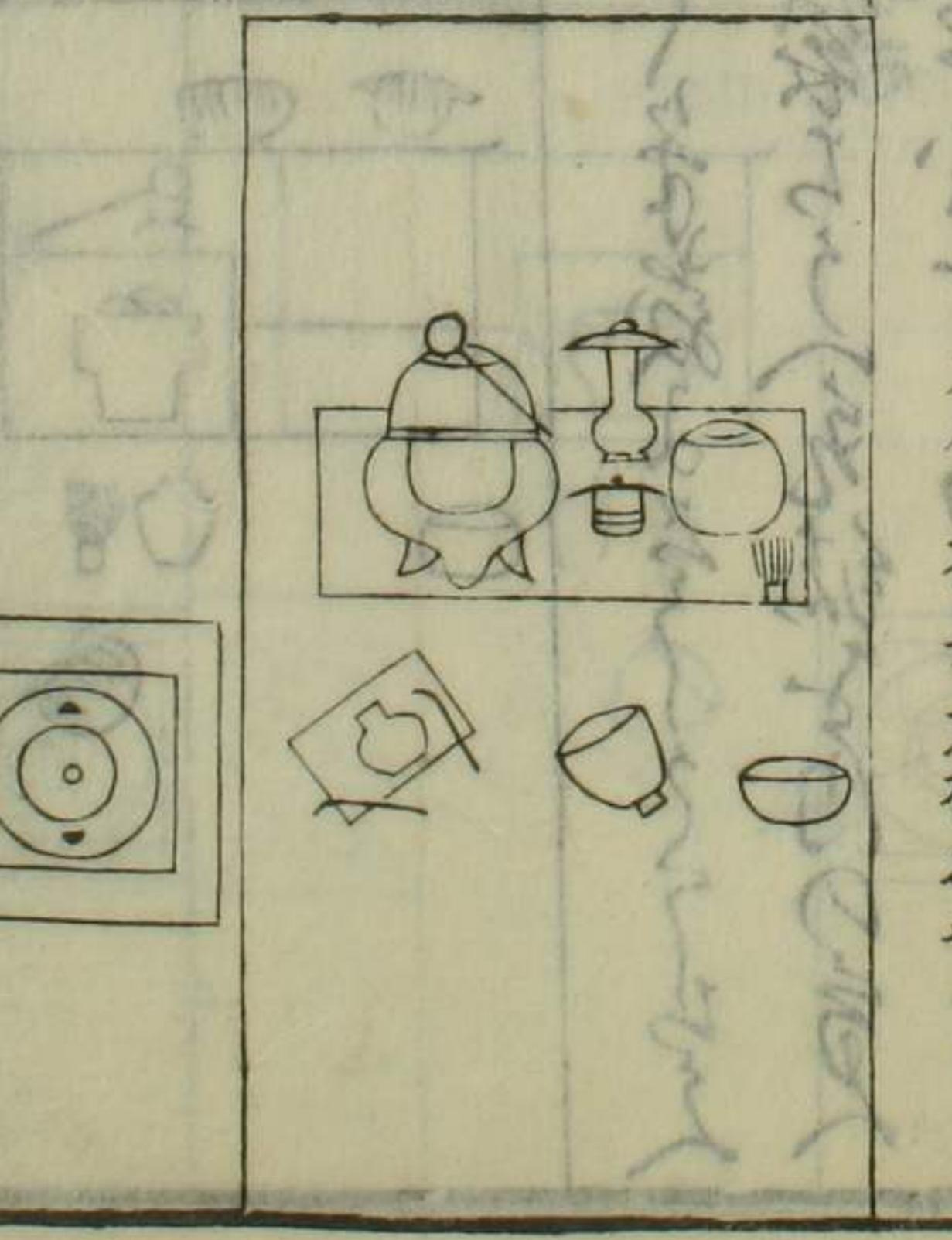
附の金の盡風炉のまゝ

かくした徳と口茶かう

基子ハ聚乐法即ノ或法
以來當世ニテ不改



基子ハ大昔ヨリ茶會ニ用田式也
大人之茶具是根本也



長板風炉を茶のまゝ
一此を茶かう
まなむあわへんちゆ
盡點かうはる
のまゝも禁蓋
と柄ね三の上をかすを
袋茶桶茶釜のまゝ
て徳のまゝのまゝ

一びと茶脱巾桶

よもよもと出茶釜

人茶桶のまゝ

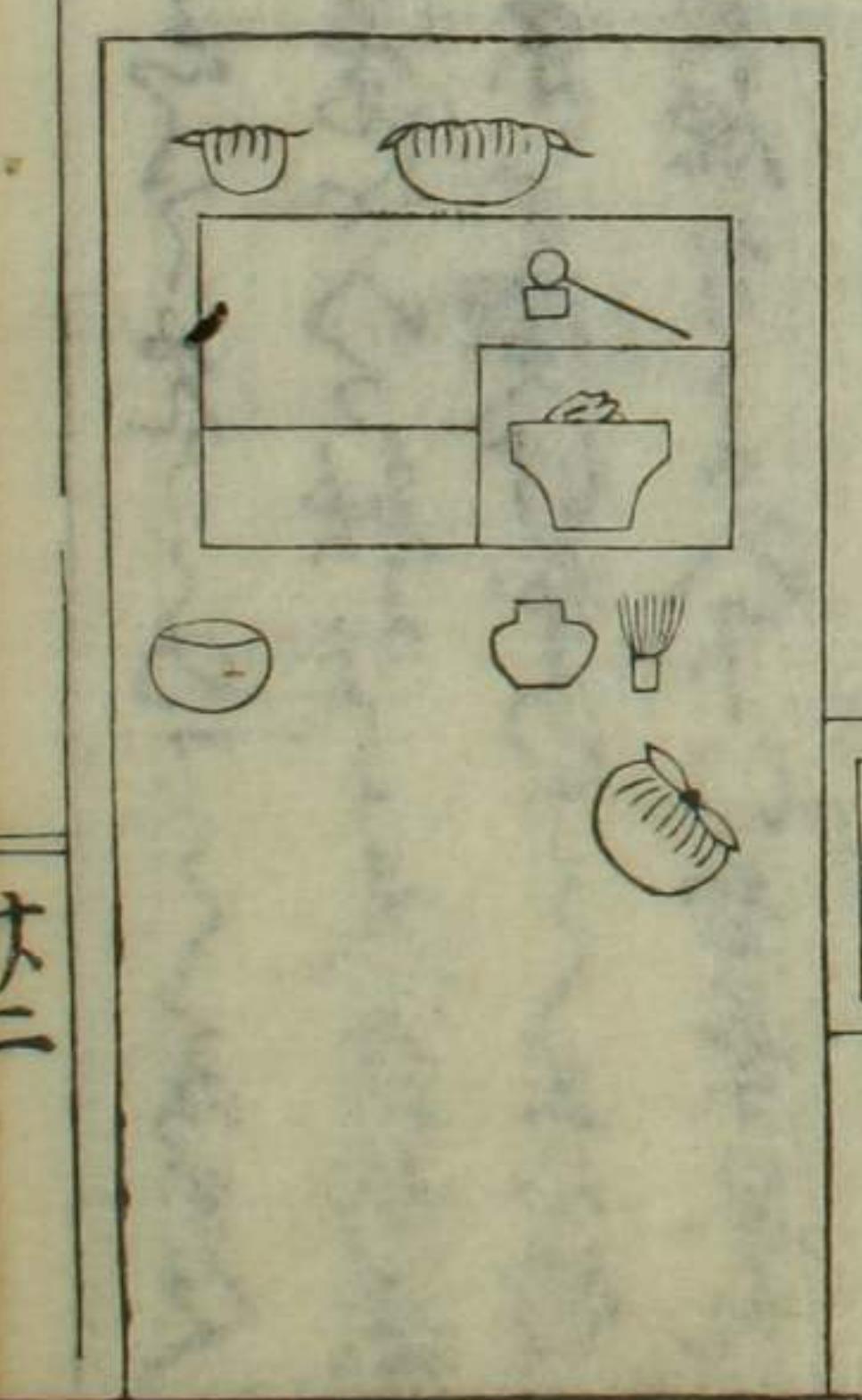
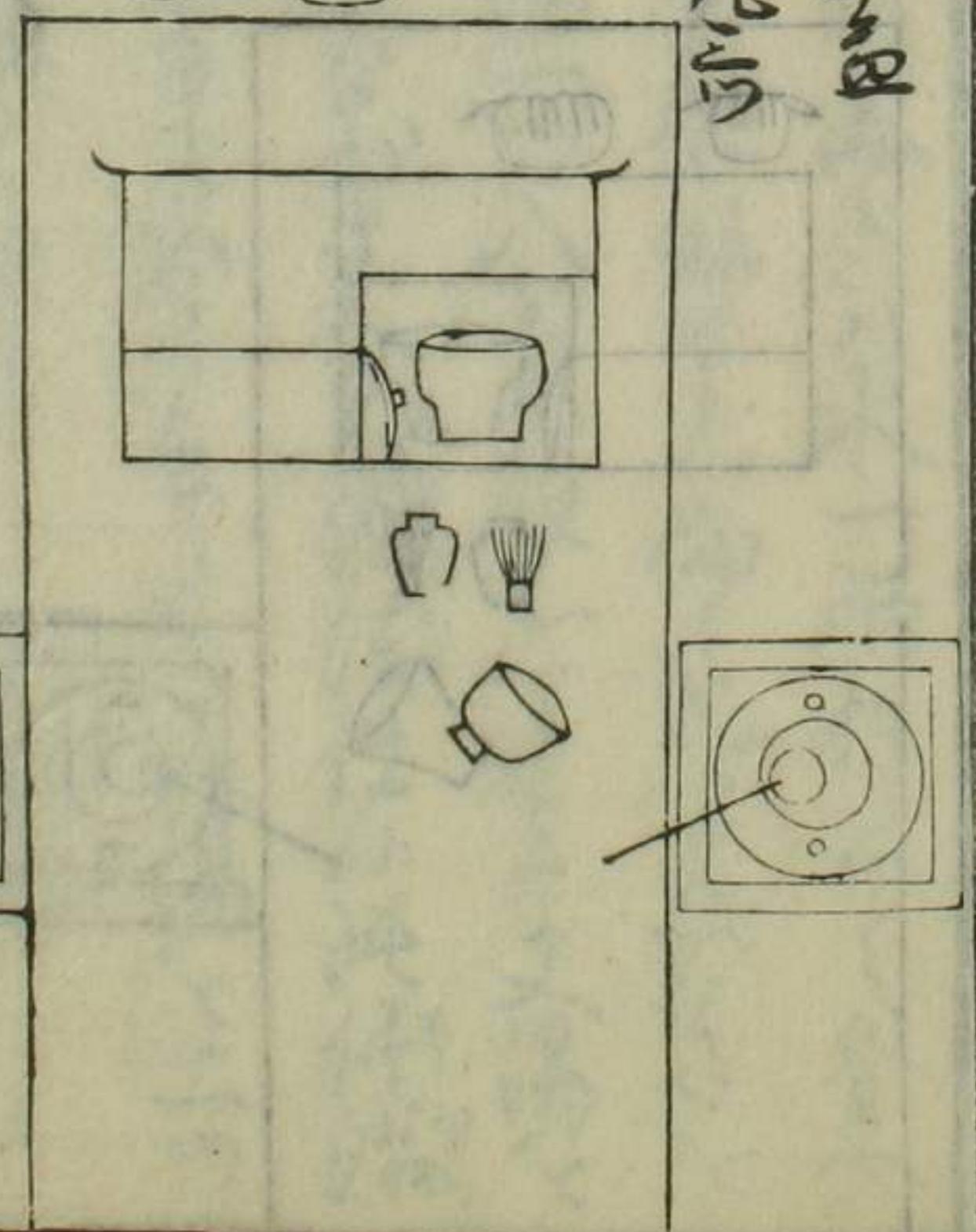
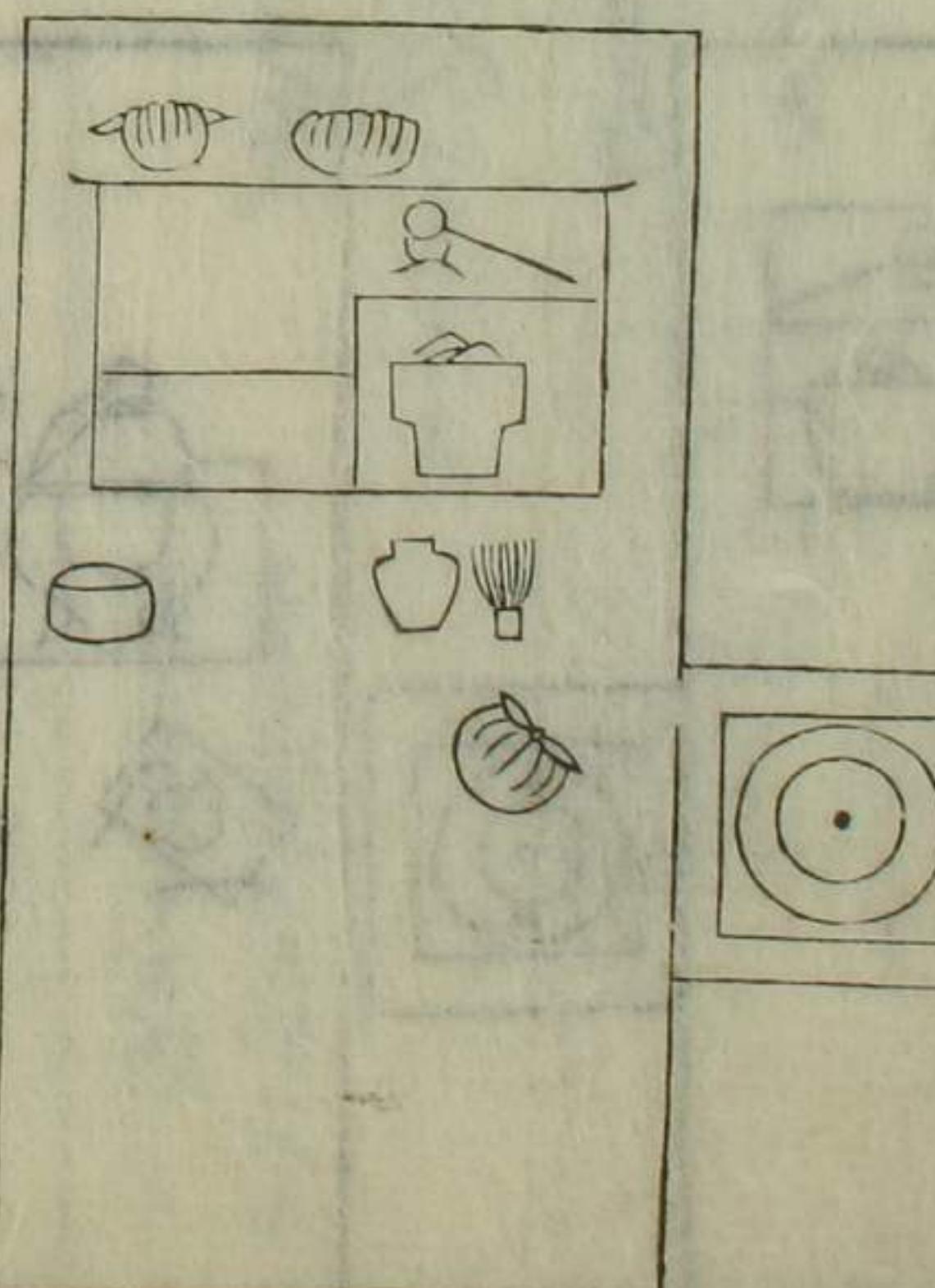
茶桶袋のまゝ

多々御迷惑な事で、嘗ての如きを恐れ
ては仕事に専念する事も出来ぬ。此の時
は、内にひきこもる事より、外へ出で
ても、また、家内との争いを避ける事

小かげ茶次乳茶

卷之九

の緒がわからぬとされかふくにまやみよらうとらう
あひるは旅取出づるもはあらうへ毛結と力の重
まほへ相のまかよせをすむとあめの角あくへ



の差色をうつす陽二柄扱八分金の差色
の柄扱子主、重小治系父名乳

湯家

いり御あづかの

わが家の家業人

卷之三

系巾取至家

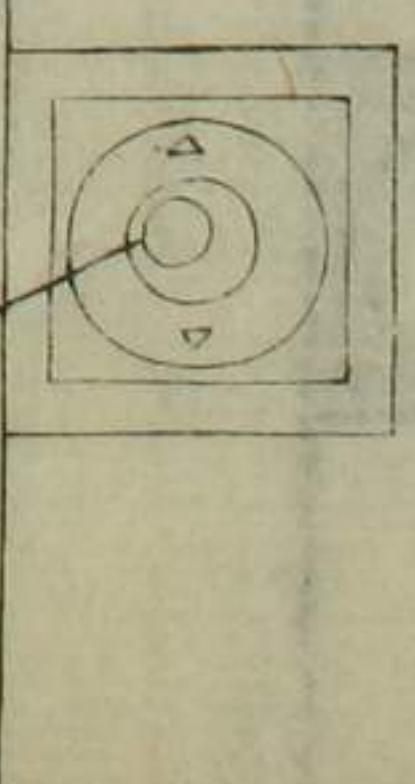
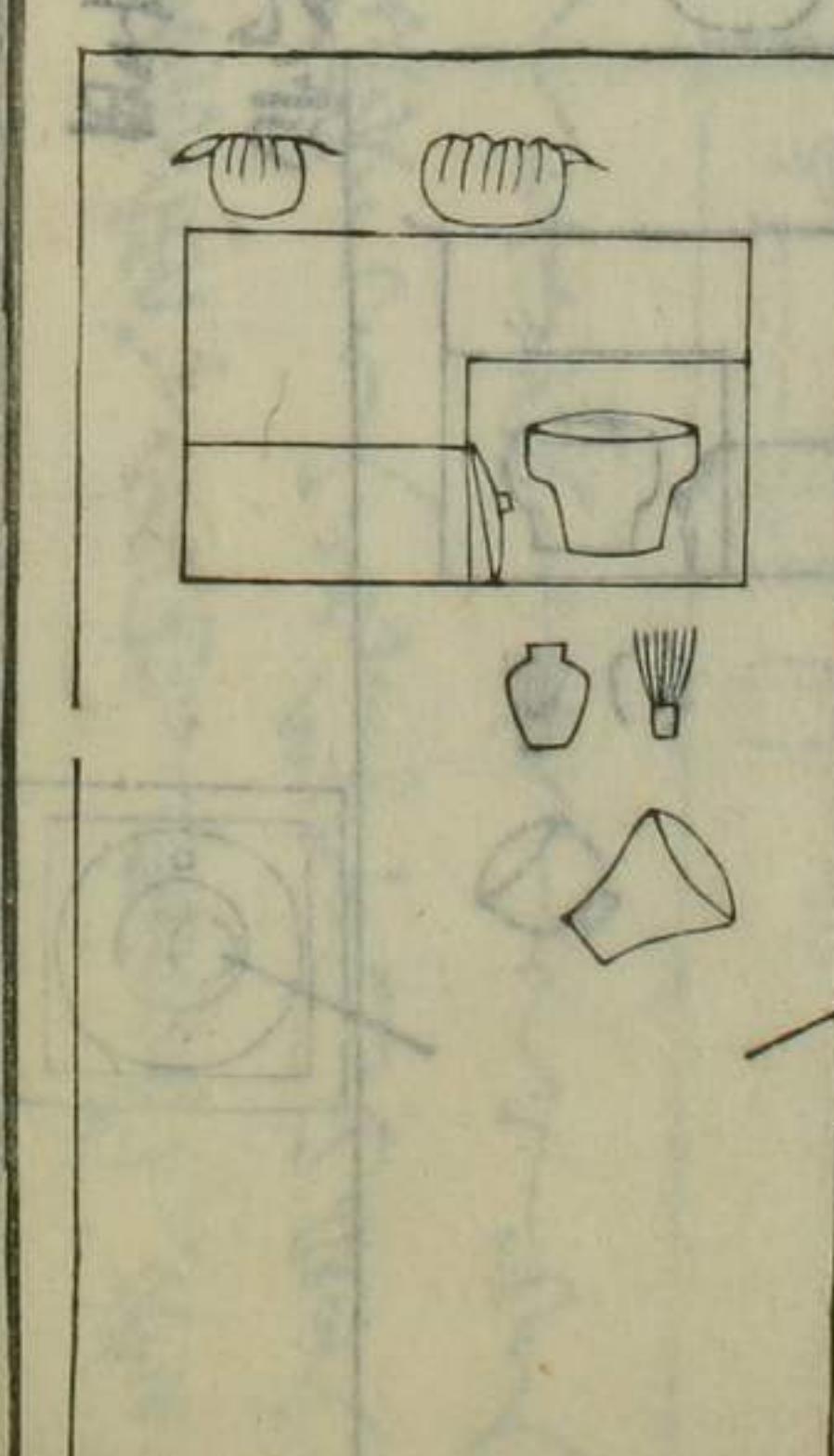
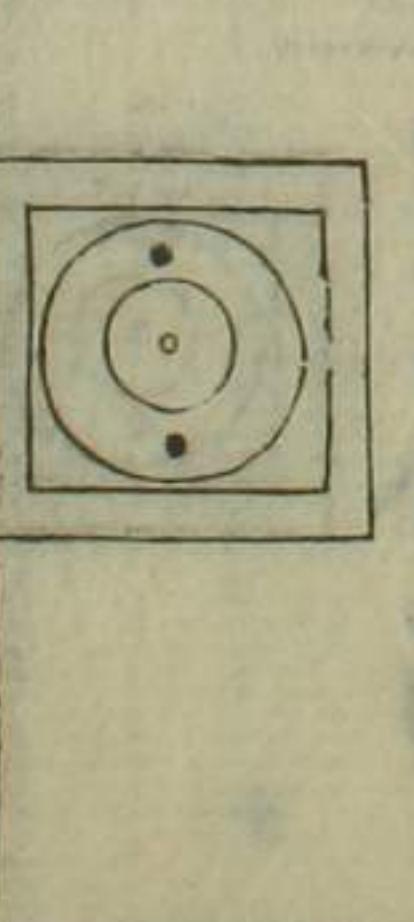
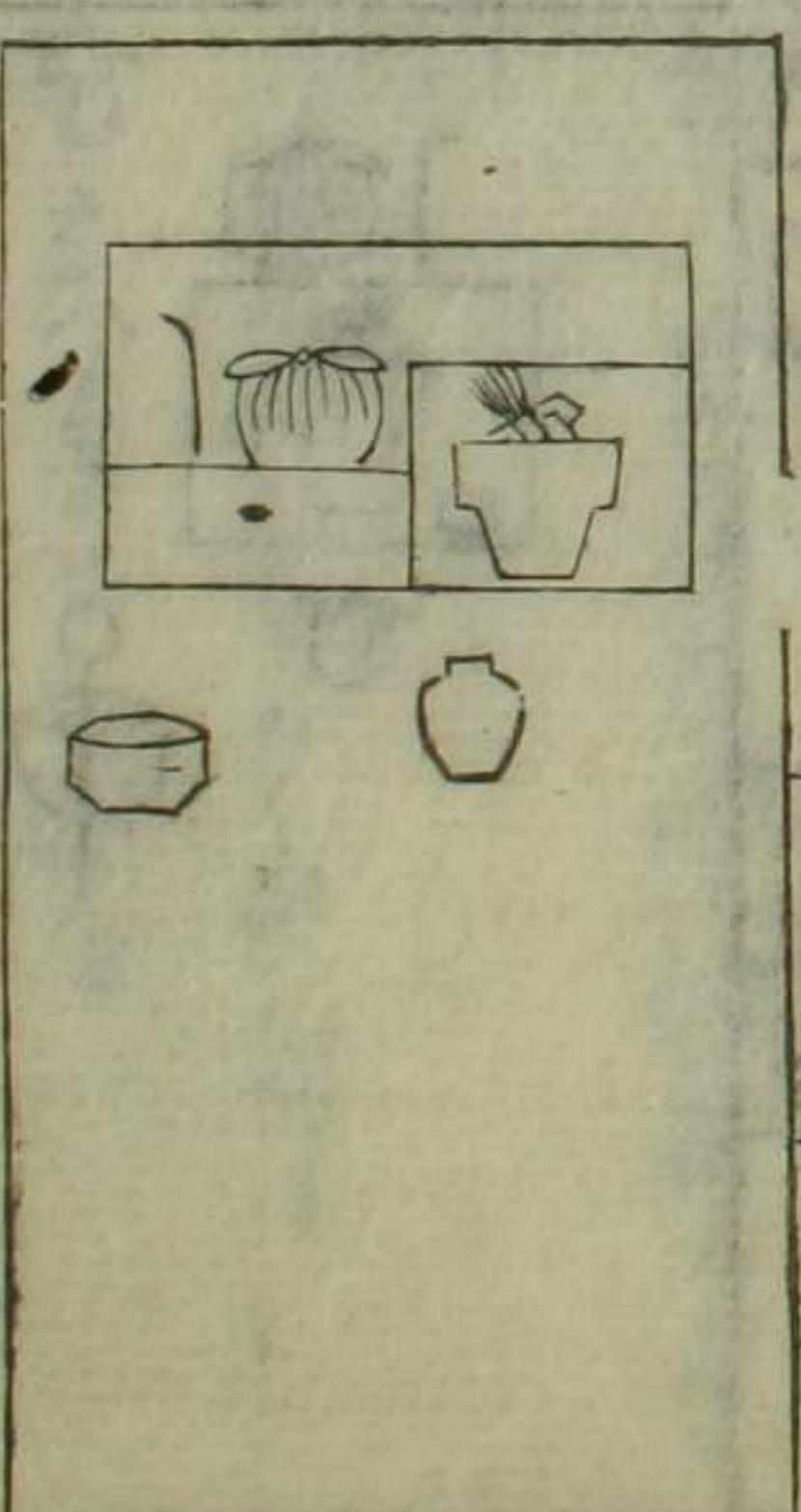
上湯と核舟下の蓋を茶巾とすてせりとのてくを差人
あき茶碗を差入れ蓋をまといへつ缺けと又茶碗の茶
碗よりけ茶入を差入せしと廣げゆのてく茶碗的
核舟も茶入蓋を湯と缺けよへ下に茶碗差入
ゆりかのてくを一弔とてあ出茶碗出とせらる
やとあ全の蓋とも核舟へ

棚と蓋を毛と上

毛被すをまく向
左弔飯うそあ

毛され出茶の
蓋と毛茶巾毛

蓋のとくとあ是の蓋をひくや水一柄核舟の父
さ一柄核舟下よ重ねてつる茶碗飯うそあくと毛の毛と
空りよ毛礼わり核舟れ湯一つ入茶碗とすと又湯と
一柄核舟入茶碗すらお核舟と毛あく不御法はれ此後
てやと云ふまで云附た核舟と毛と又湯とニツ
入茶碗湯とて
引上湯とて茶巾
毛被すまく毛
茶巾と毛核舟と
てく禮わるの蓋
れとく核舟と毛



茶碗とへ縁とす
ばひふかわゆる
よすへー板茶碗
板へと茶碗の乳

いよしきれら柄紋とえみ城一の口
掌れ蓋とほり柄紋とふく板よ向

持の蓋する茶碗と茶盤よろ附あつち茶葉乞
きてもくらまの盛鴨を以て板茶碗ゆひて出を鴨
へてゑ皿とまく出盤の内へ茶へとお鴨ひへ
一右鴨を口にせしけ茶葉茶碗のみ不ひ茶碗
簾うらわのやうしてへ袋へ又かよち茶葉へとく

點つううすも茶碗よへ鴨か一長茶碗の如くお
と用てよ

写あくす小体巻袋茶碗のゆ

一些を不茶へとめたすよ
茶碗と茶碗と茶葉を
もくらまくひとよ茶入と
もあはれとおは茶碗のく

ん残ちつたりよ鴨う牛か一右鴨をよばせうる

が巻子袋茶碗の事

一じよあらの筋りかくのとー點れをうる

一右鴨をよもはと不あらをもくらまく

わづて巻子をあり小てい
うすとあくしきのまつ

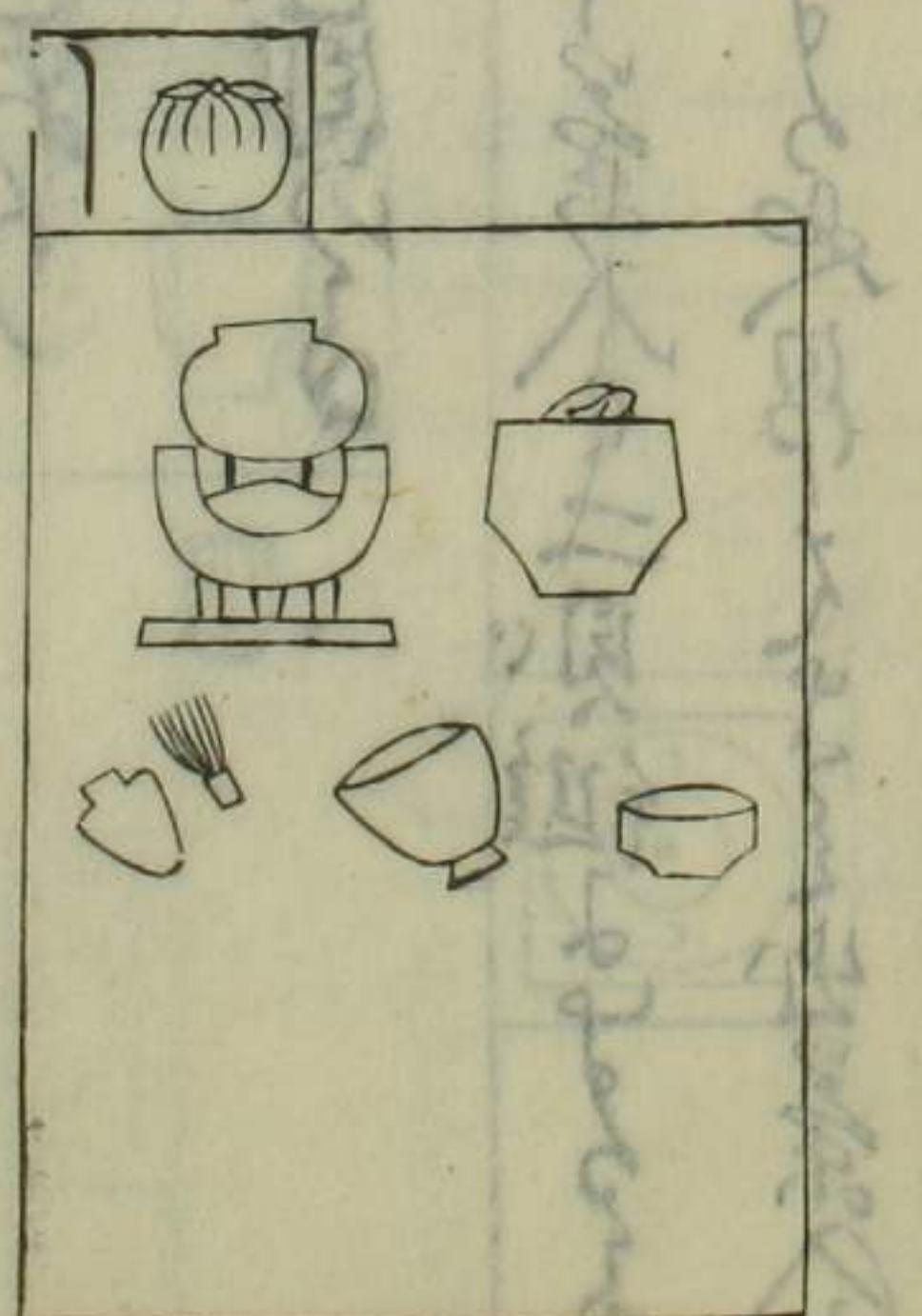
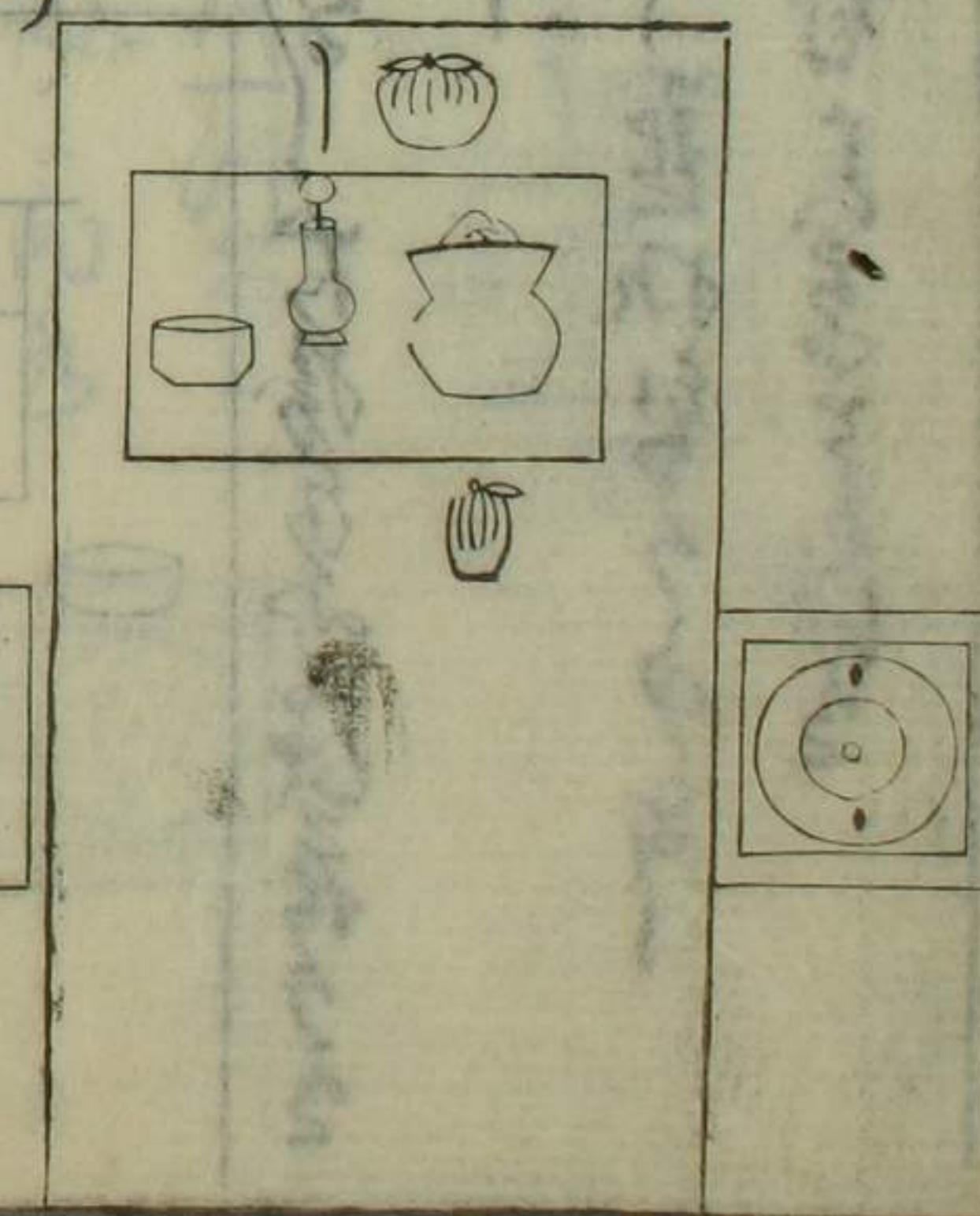
えもて點らう

きりきのふはり紙

写しれど

こゑもたは葉葉碗のまつ

一げふあとてちるのまつ葉碗
のまつ下板葉とまつりん
葉とあたまへよろこみが葉
船うつゆか 一だ勝ひあり
けか勝多もまみの葉碗の



ひまく出角狀をふあり
風炉葉葉碗のまつ

ひまく出角狀をふあり
風炉葉葉碗のまつ

一げふ葉のあひつかのまつ葉とある黒の附へげ高
い葉とあひつかのまつ葉とある黒の附へげ高
一木筋ひまくの葉葉の葉の湯もあり

茶す供葉碗のまつ

一茶す供葉碗水薬の葉のとふすの葉碗

あらかじめ茶碗の用へよけ

一は茶器つゝけ

器のてく點ね

あの仕法あるよ

かうるるやかな方の様をひけりありて

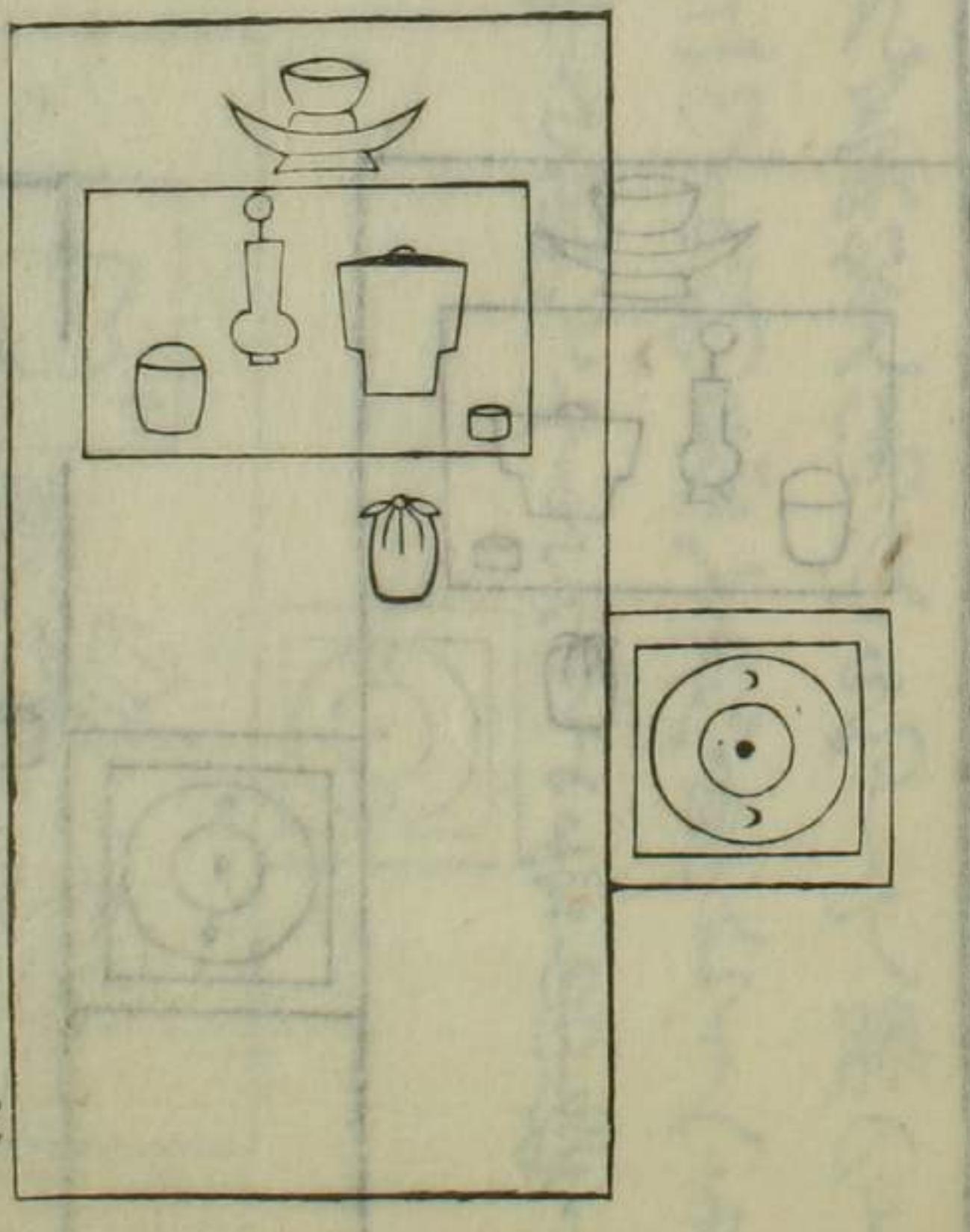
もわらわの様をしてあり

片葉子底蓋を固ゆ

一は茶器形りかくのてく茶器と二は組よするもの

あり亭主縫ふはすつや席とて出茶入が

よせ巻て角とあると
れりとてあ盤下へ
若巻りひとまい
してまく圓卓
縁あらすて巻
天目丸出だま



茶入袋化れて天井へ上帛引ときして茶入丸とゆへ
墨りとく茶の葉みゆいとけ茶葉葉を出へ茶うわ
巾にて天井とゆい帛縫ひとて茶巾を出づよおて
あらと茶のゆくとめ茶巾みへて天井へわけ巻とあ
りて引かず茶葉を天井とて茶の葉をて柄取

ゆひ出湯一つから入
りやの食ひけも

ゆくと同と

ちぢて湯を

ゆくと同と

又寝の室湯

一入内敷室

やせたての室

ひ蓋すきま

やせ蓋もく

かま風呂

固へあひゆてまゆへれ蒸せん湯ひこうて膝の上
よ垂縫あつ席取出二つよお巻とらせてらうへれ
あげ先からづきよもゆと服とさむづきよも垂縫よ
おまくと蒸巾れまく

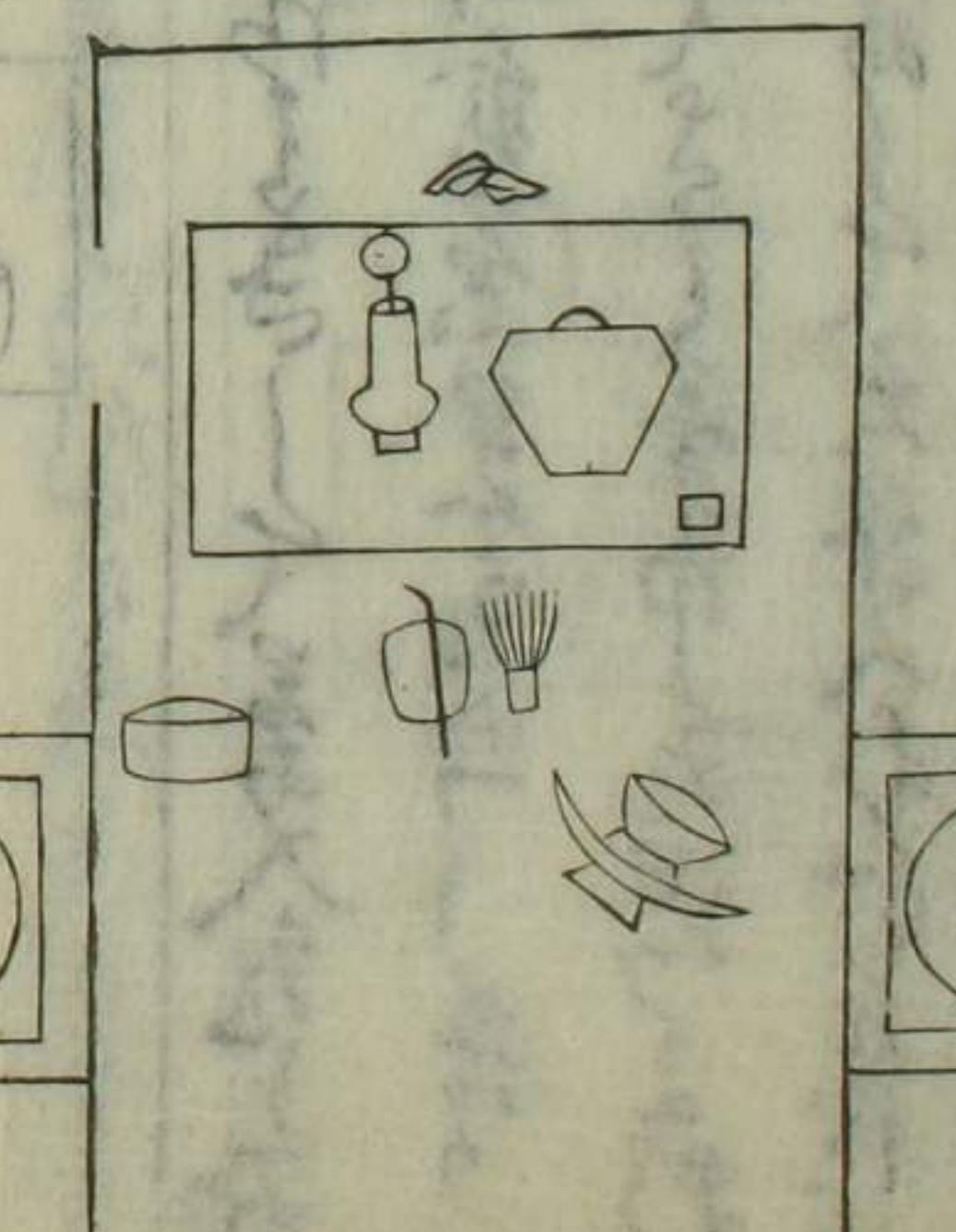
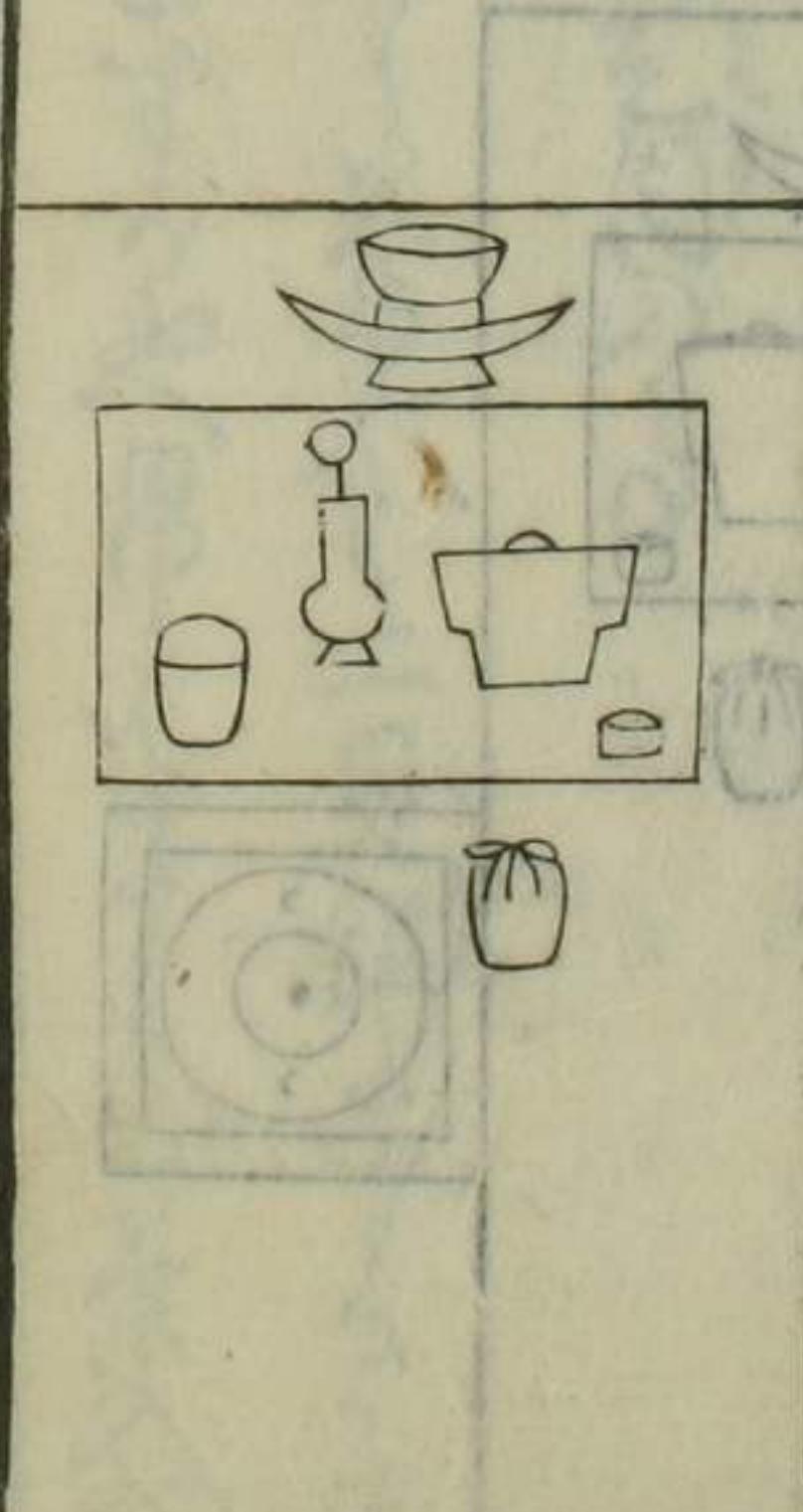
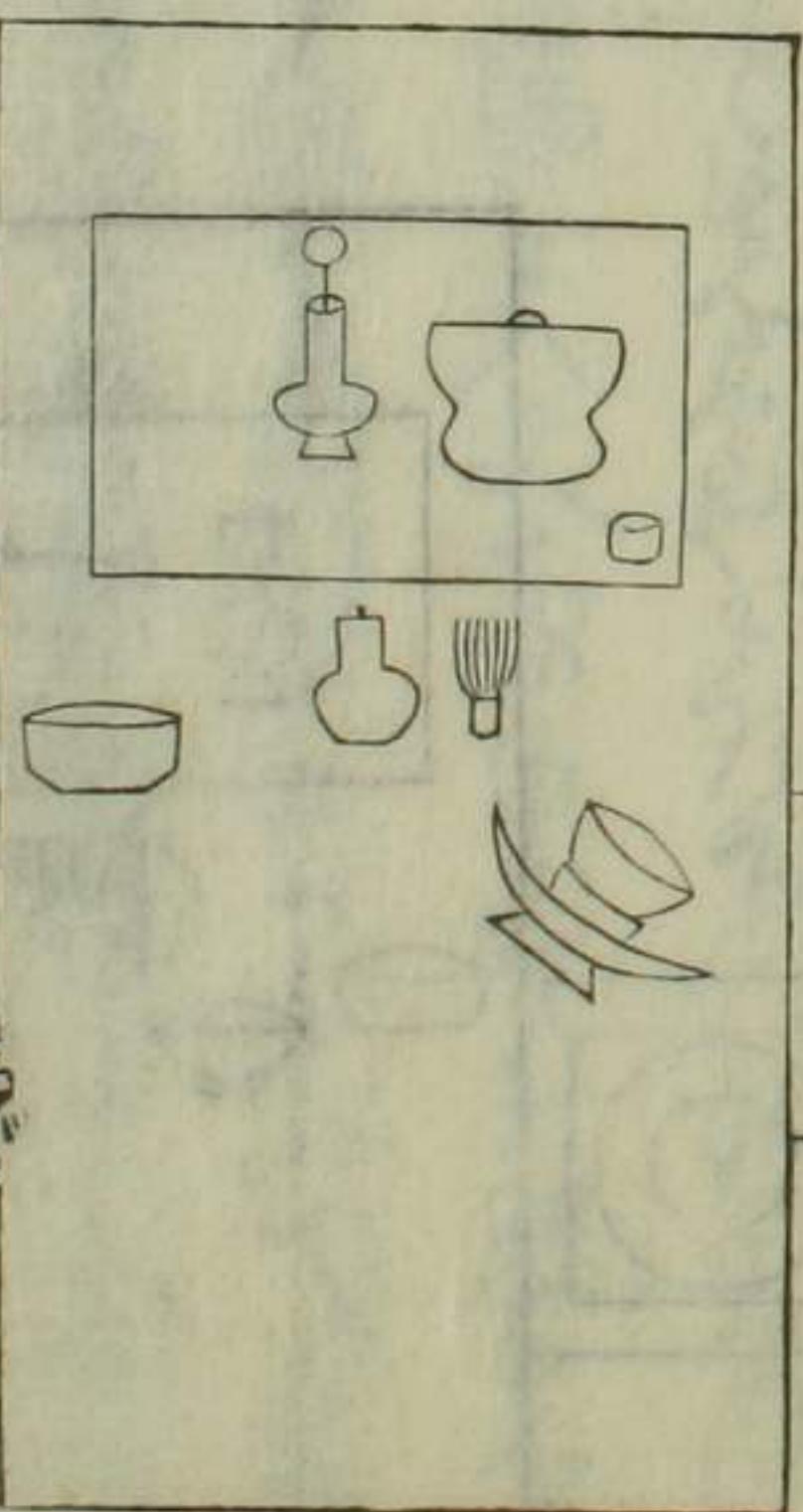
まゆのまく

傳て枕上

育乳湯

二アヒ蒸

よかうと見りふれ蒸巾れ湯とすて解ゆへゆへ
あひよもと巻よおまくと蒸巾れゆくとよ蒸めえま
よれまくと入本すくとおまくと蒸約ひ三角のあらうとてまく



うす御ふておもひてえ
因のゆへ入るこじはま

と産げおま

入ばかりてり

やれ帛にそ

蓋丸湯と茶

參れかくと茶葉を本度よ

毛づか取る

互角をもたよ

てひき角を拂

毛づか拂か

毛づか拂

柄拂毛づか毛づか毛もよ小盆の方へ向ひて腕巾

らむて出又居坐り蓋丸湯と茶巾にて盆の蓋

と毛づかの蓋と毛拂ぬ毛拂毛と一いわゆ

拂毛づか毛づか毛と毛拂ぬ毛拂毛と毛拂毛

あひよて毛づか毛一礼毛湯と入又あひよて毛拂毛

毛拂毛づか毛と毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛

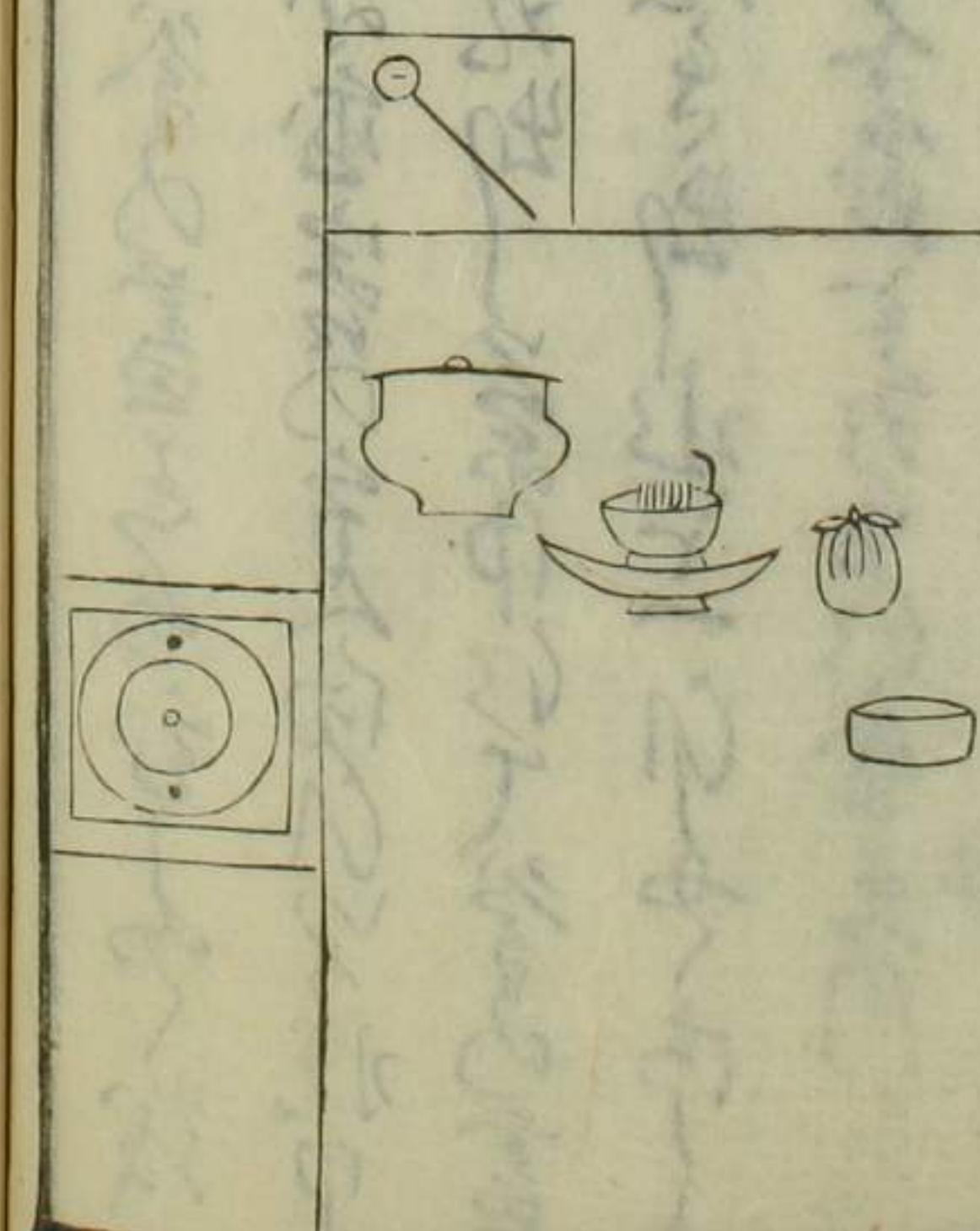
毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛

毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛

毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛と毛拂毛

卷之三

此のもののかくめに
春秋の事。事は通
りか傍にはじめあ
り、多くは二種類の事
れ寫る。



一
ゆきは山脈其の向のま

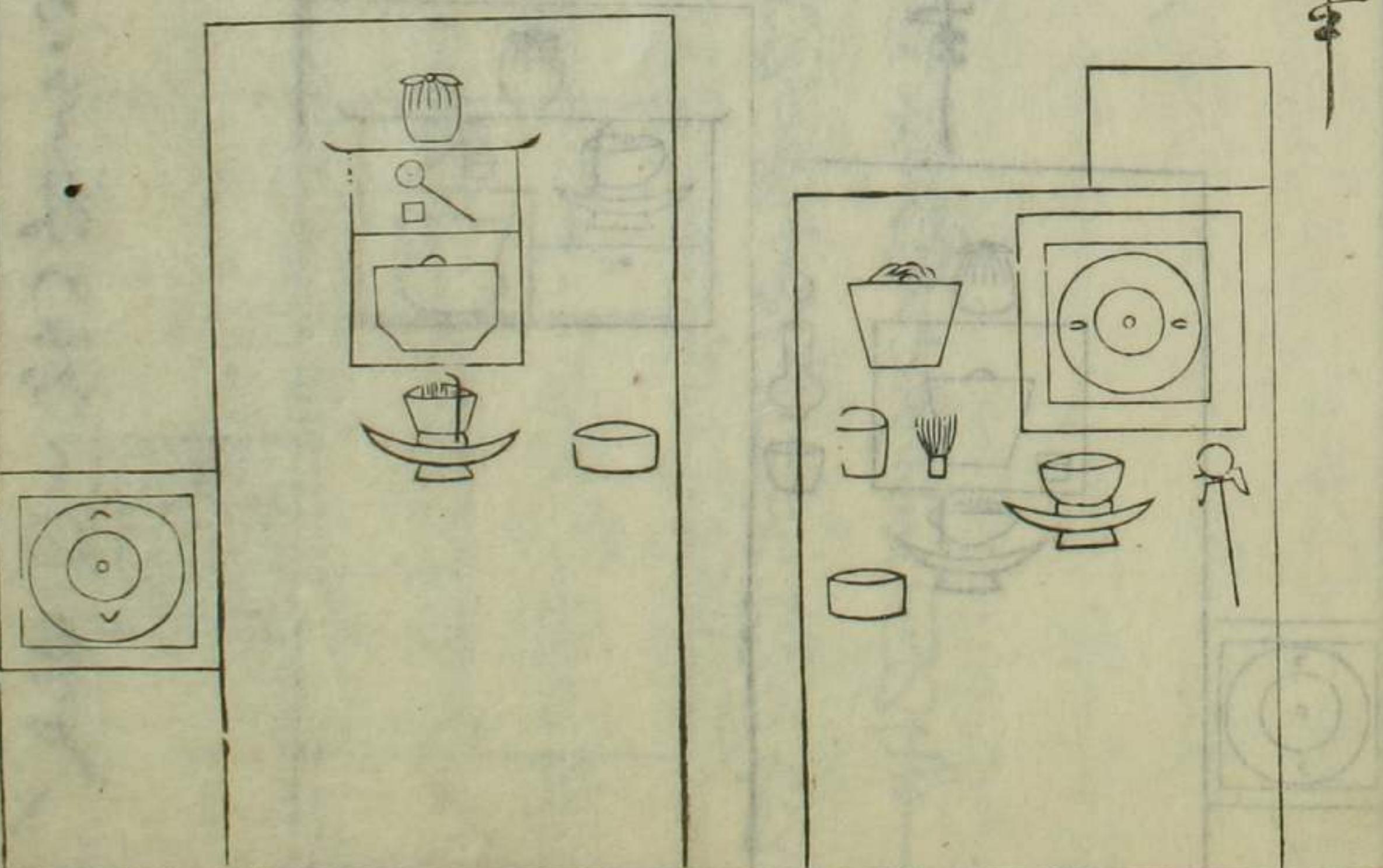
一ひきと本居宣長の點評
そのもの本のところ

大徳の内に中徳の
心がまえあり

插樓相右勝之同

一か月を経てもまだあう
一ぱの木がくのま

毛魚の鳥の毛



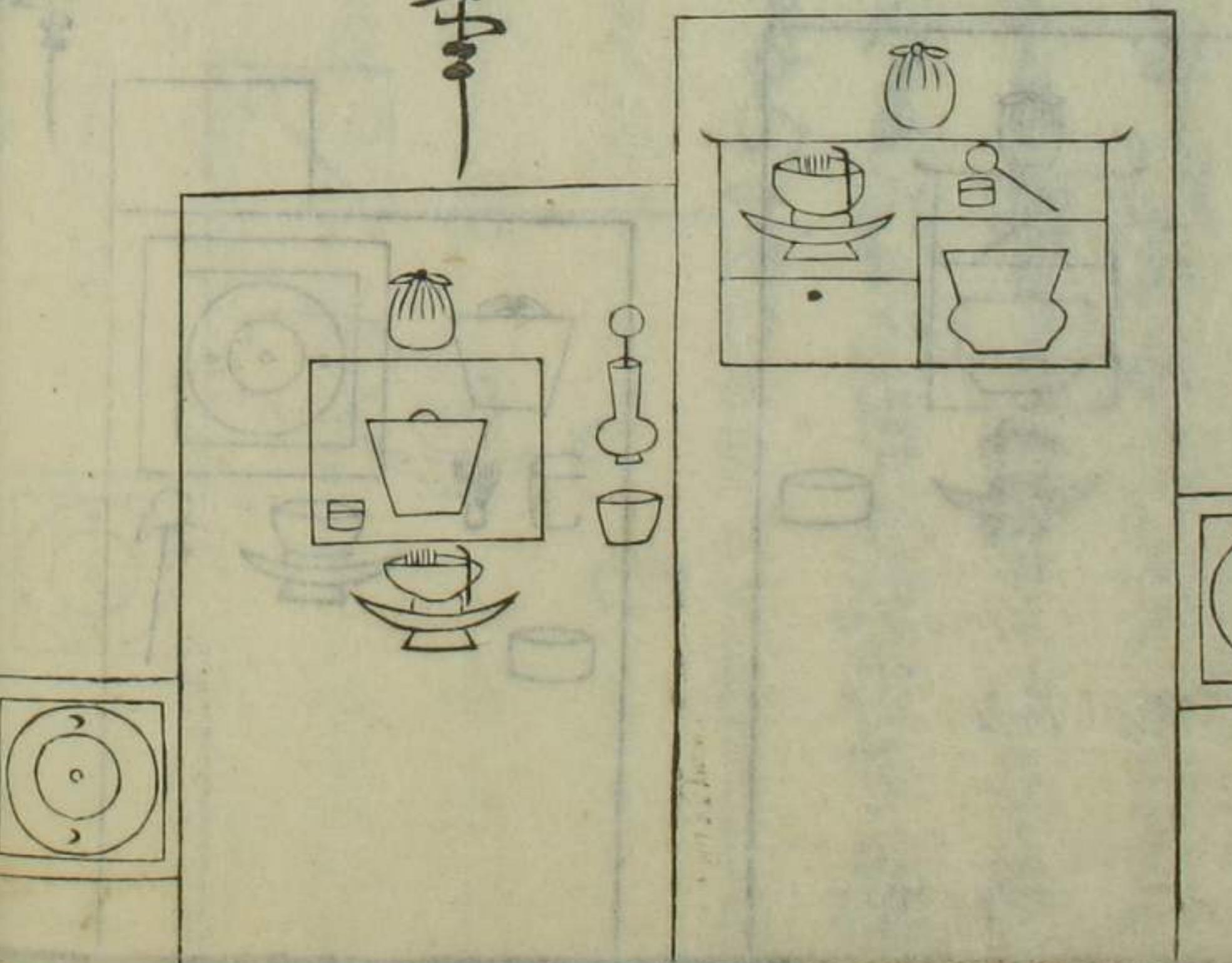
とあらまえとれぬるのあつた外へあこのの色也

御船本綱の巻五

一大筋りあるひのあわり
一けん船かわくわげふの
船みと舟船すもあく
よみのすもとを運ね
せうるゆだ

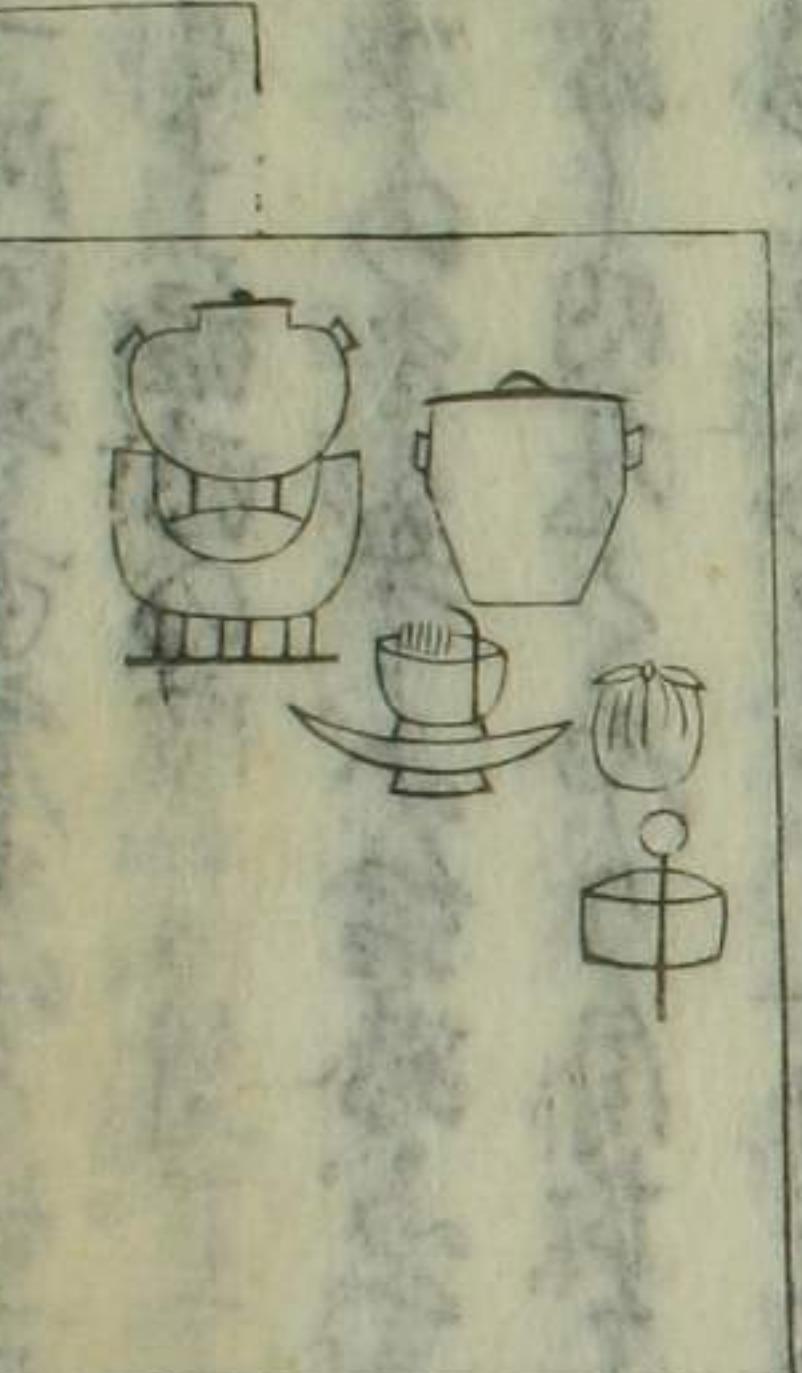
小体夢本綱の巻五

一此を本綱つかのて
船と舟船は一具を差入
りよお車もと二合鉢

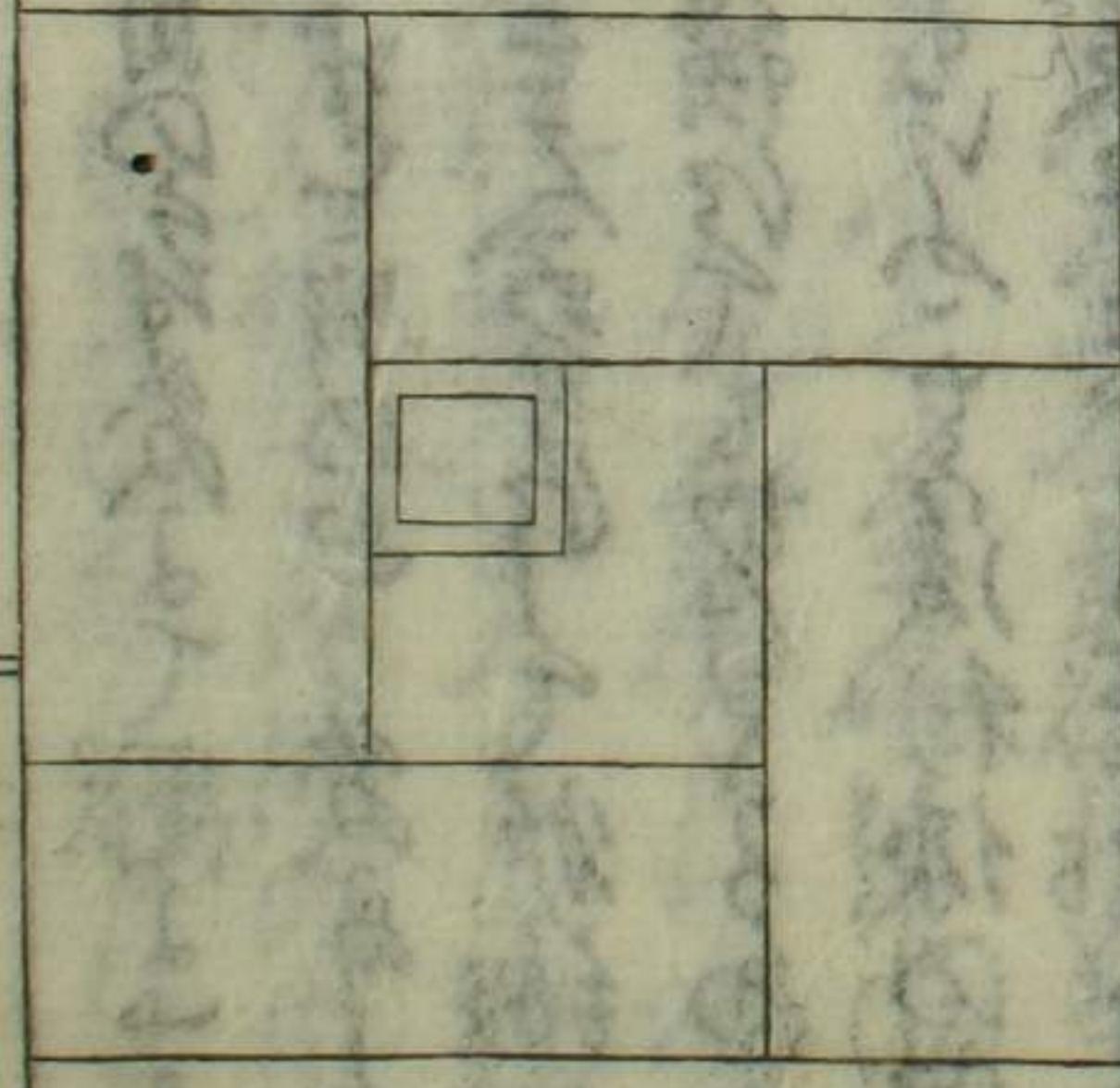


よきやもあつせむおね
きとおがよも置くより
もあつてよどてくわう
船ねすの色也
一此を本綱かわくわげふのあくと大筋を運ね
せうるゆだ

四
五方



易 疎 舟 本



卷五

二十一

此後安ハ被れと居るよ
事のあればされが爲
て遣され乍勝を也
是事はが爲て多きのれ合

一毛もひきの内の内に身構と傳の外よお出よむ我も
不よ索人あまの孫と見えぬ及第入第源也か中
源よ而て系入とむやのをとくに系源と云ふも
ゆふよくとてくちのひもくとてくま縫しらはせと
事小指かと多文多義みてる家多義とくによく
極立ゆる盈の也(蓋面挿入めゆうと同の皮)
入あひのそくみてる盈鳥のくへ歴史の事あくとく

卷四

九

あなたの嫁のよき

卷之三

承知候と申候

卷之三

卷之三

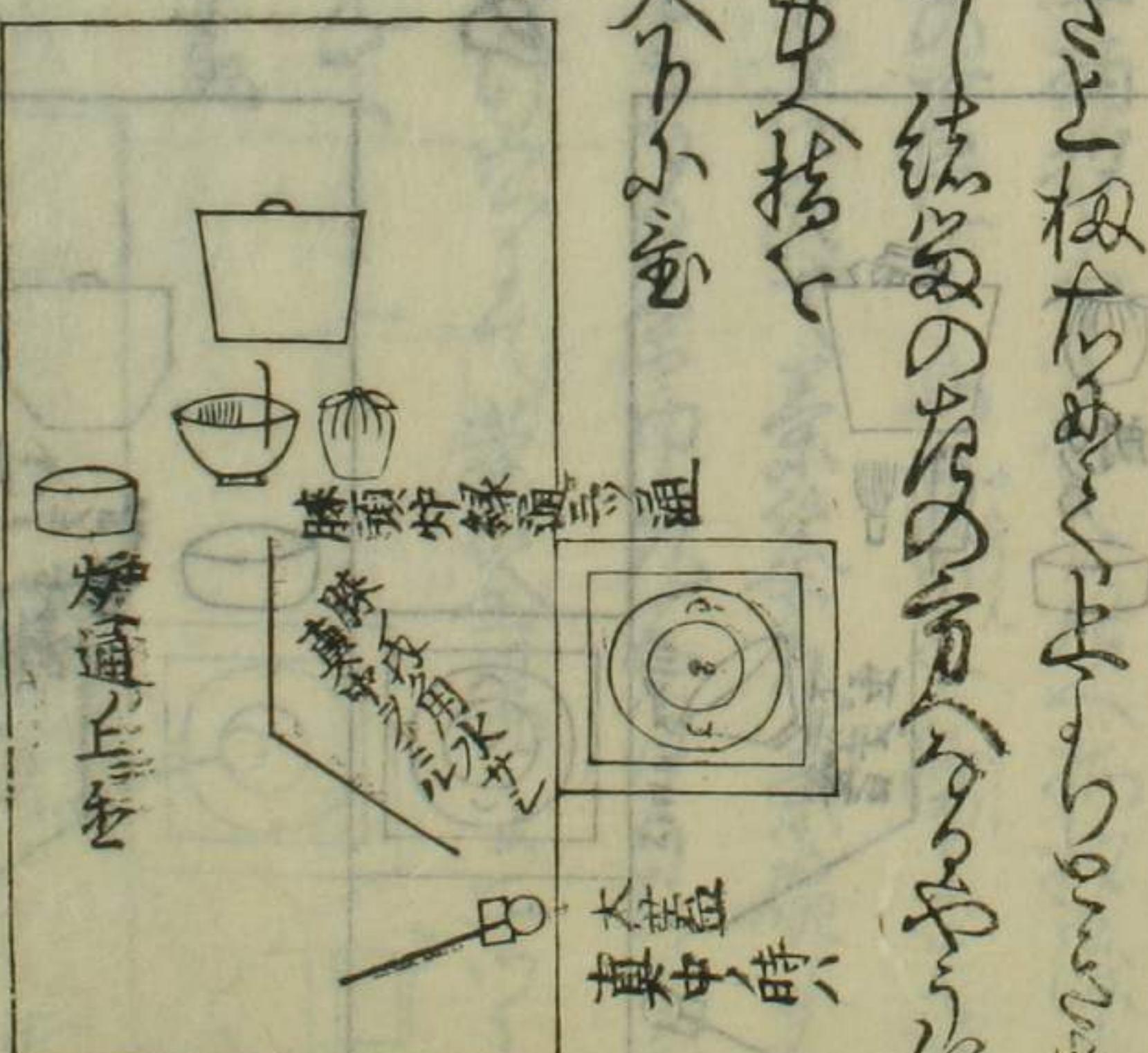
卷之三

家學

毛公鼎文

卷之三

あがれもあらわす事あつてはめに
とまつたの胸よかむじゆく
ゆきすら意のへりよせや持て
入る儀とぞとまつたの方を



煎たの挽巾とたれをも
水素の蓋の上と一拂て

又は(海)た
あくま素巾れ

も拂の上と拂

又たの挽巾とれり(谷の)

蓋成丸蓋を

もけ挽巾織

を(谷の)と

蓋成丸蓋を

もけ挽巾織

を(谷の)と

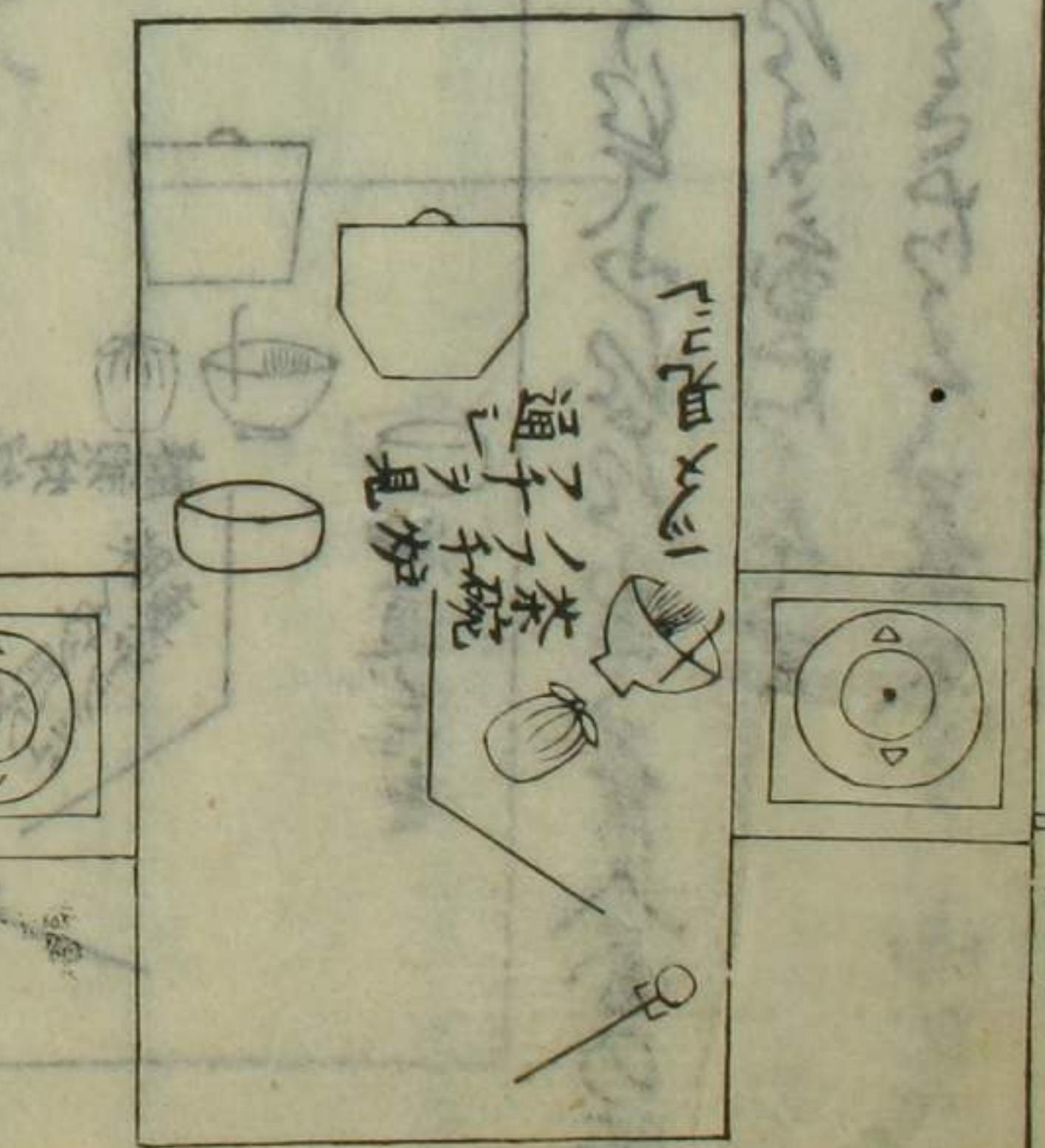
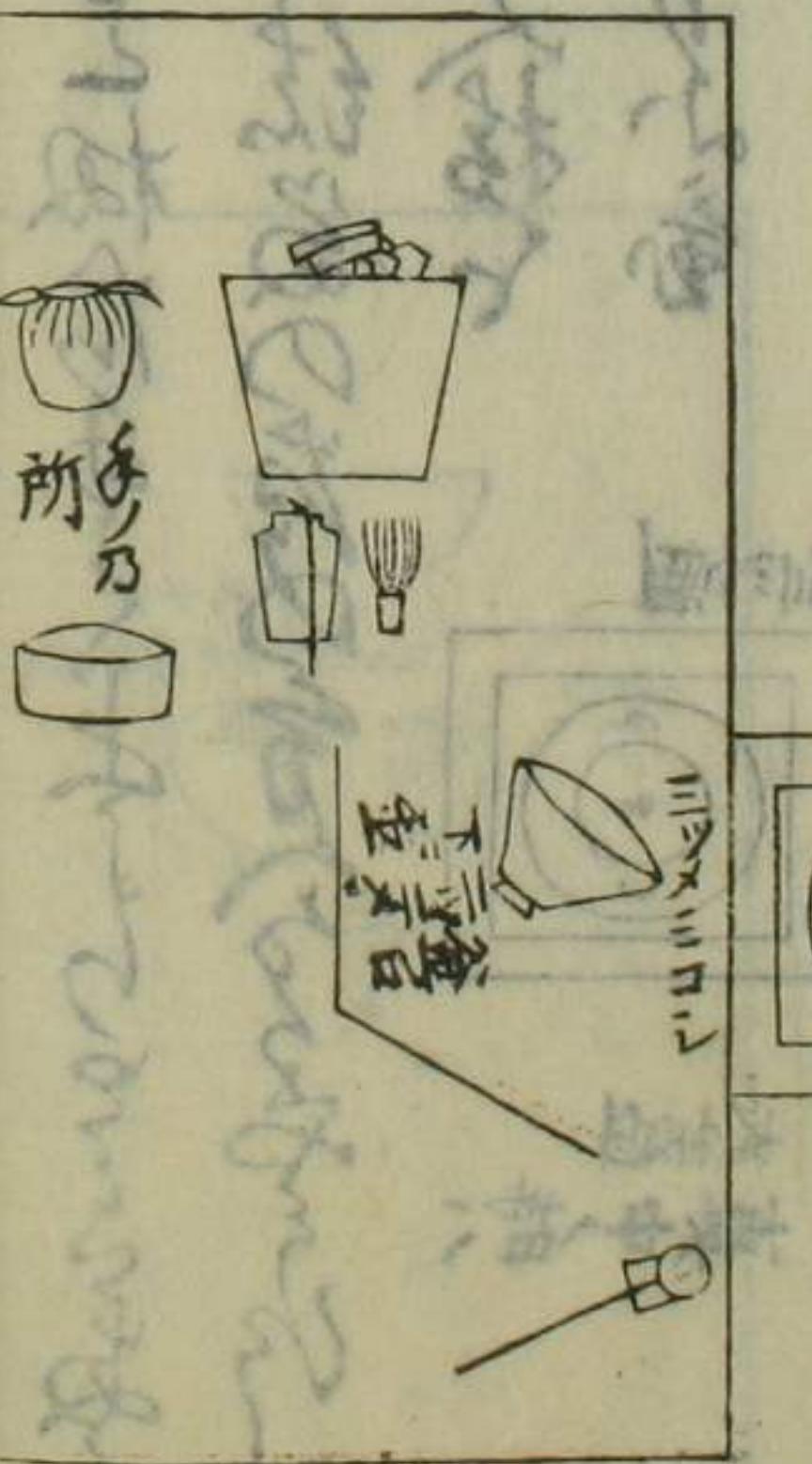
蓋成丸蓋を

もけ挽巾織

を(谷の)と

蓋成丸蓋を

もけ挽巾織



湯口としめ肉巾と入蒸巾れ踏板元蒸碗のよらへけ
こはぬ肉とこちてひたすてりよもじもじにて蒸巾れ
あげせじて思ふわもじ
あくあ活のよらあけむそ
あくあ活のよらあけむそ

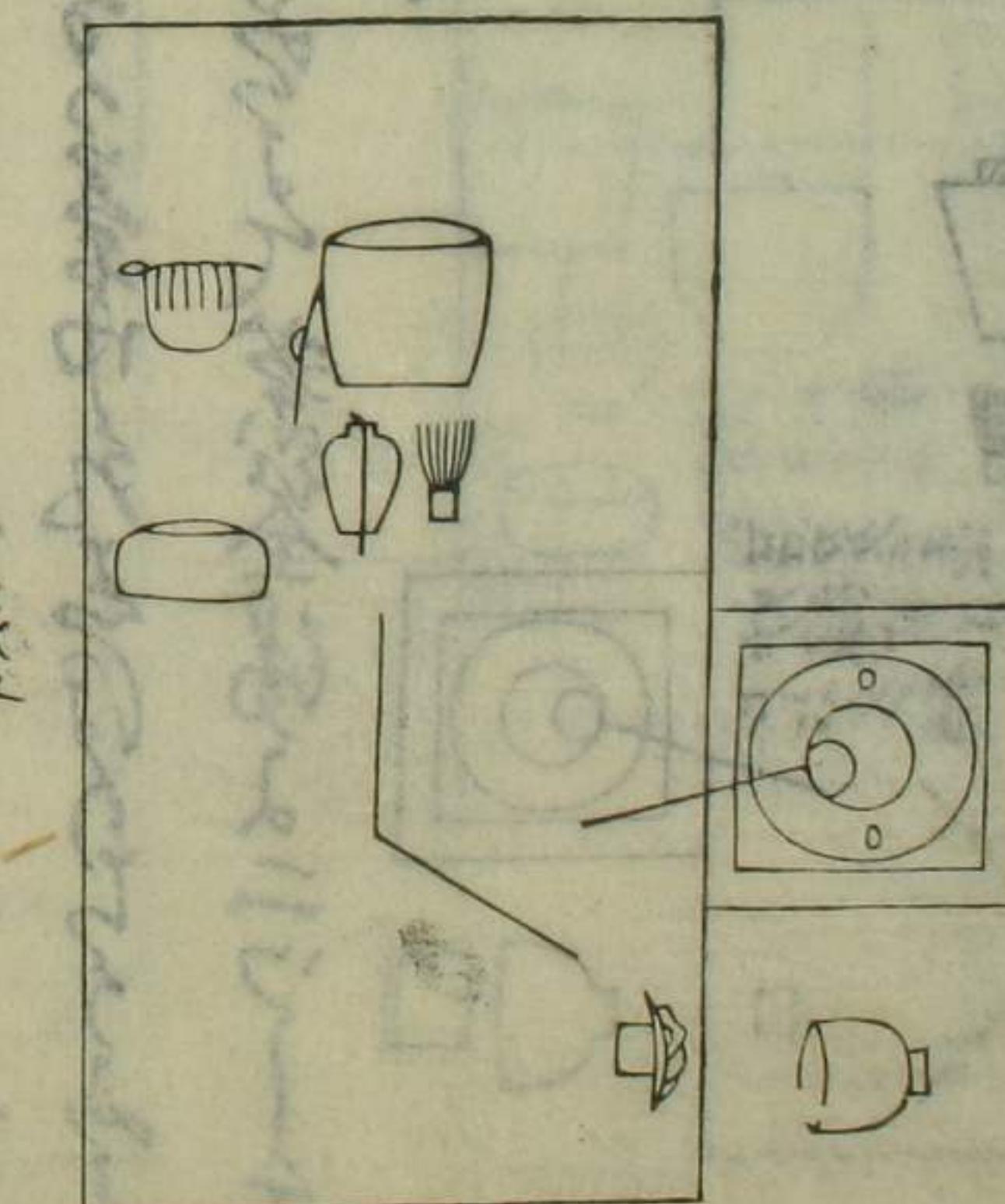
蒸巾れなふ

て蒸入の蓋が

縁の角に蒸

碗の上もて蒸

とくへと一茶杯入口徳あづべーあづ速のひことく
え蒸のトヨヌ蒸とくを触り入る蒸板蒸碗の縁
みをもひて蒸入の蓋にてかくへまつたて蒸



取れたりみて蒸碗の縁をす
こはぬ蒸とくつけ蒸碗の
縁も蒸故す

もひて蒸入

きりとひて柄

取れたりみて蒸巾れ蒸板蒸とくをもて蒸
巾れ蒸へもひてもひれも湯とくへりてり板
取板の初よかげこもとて蒸板もとと蒸板
のうちよ派あつて蒸板もとて引あすがな
もおからう帳巾れも出でるよわらのぶよ高
しく蒸碗ももへあひのあらとて蒸板もと蒸

居仕古板りやれだ湯 父の言ひめたまう挿ね
とみ翻ふけたとて蓋面水盤の底よ居せりとあ
向いあくと言まし幌巾解つためて蓋面丸ち湯下
を幌巾丸父のゆ拂ひ蓋面あわき幌巾解よるま
多様のどうぞ茶巾丸父の蓋面よもじらひて水盤
蓋面水盤のとすて病を切ものによせをうけたまひ
やくれだ湯水一柄挿くと父金(ぢかひ)よもじらひ
ふ茶碗解くと丸せんゆくとてひどくあくとあくと
室乳を烹(こしらむ)と同板挿くと湯とくと入挿く父金(ぢかひ)
ちふて茶碗丸だく湯 湯すとあく(ひれり)よもじらひ
とくと入とあくと水とくとあくと茶碗よ入すと父金(ぢかひ)

入金(ぢかひ)とあくと水とくとて茶盤丸茶碗の内へ一ツ
あくと茶盤と茶碗れくらべて引あげばよまよあく
たすと茶碗れだく湯 湯すとちまと茶碗れ湯とふ
茶巾丸入のとあくと金(ぢかひ)茶巾(ぢかひ)の
ふよ茶(ぢかひ)て茶盤丸だのとて湯れくと樹(ぢかひ)
茶碗よ入茶板丸幌巾丸二つよわ一つよまく茶碗のうよ
て三と挿くとあくと水とくとれ又二つよわ茶碗とく
内の茶碗よけたとて茶(ぢかひ)とれくと樹(ぢかひ)
のうよくあく幌巾(ぢかひ)よ入すともしやお水とくと父金(ぢかひ)
のうよかけれ立くとく湯モ吹れ立くとて父金(ぢかひ)の
茶板丸よ掛くとあくと水とくと茶(ぢかひ)のまかうと

みて書と互ひつと附とする事入とえと附て互うる
らえて先景たるのをあらかじめていりやへ書に記れた
みて水盤を傍よりつづり給ともめておもねる事入の方を
帳巾を出でる。おもねる事入の書城下より愈々とが
きこむ作たの縁のとくを取事。洞とゆの書とせば
て帳巾隨へ入るのによ出をあらうへひ付與て是
確多入と又出水持とみ盤のうへよおむを管とあは
板傍よりお絆をあらむ方へ向ひ、こりへすて水持と丸を板
の下ゆひきあらま方へ向ひ、こりへすて水持と丸を板
解因不出事入とれども附ある事入とあらむが、
附の事入よのうへりのかつておもむきれども事入

湯盆之墨合

一湯盆
一墨合

但一角を差す。とてこの御とあら葉をも

二事とおの事古國藏近來用此後

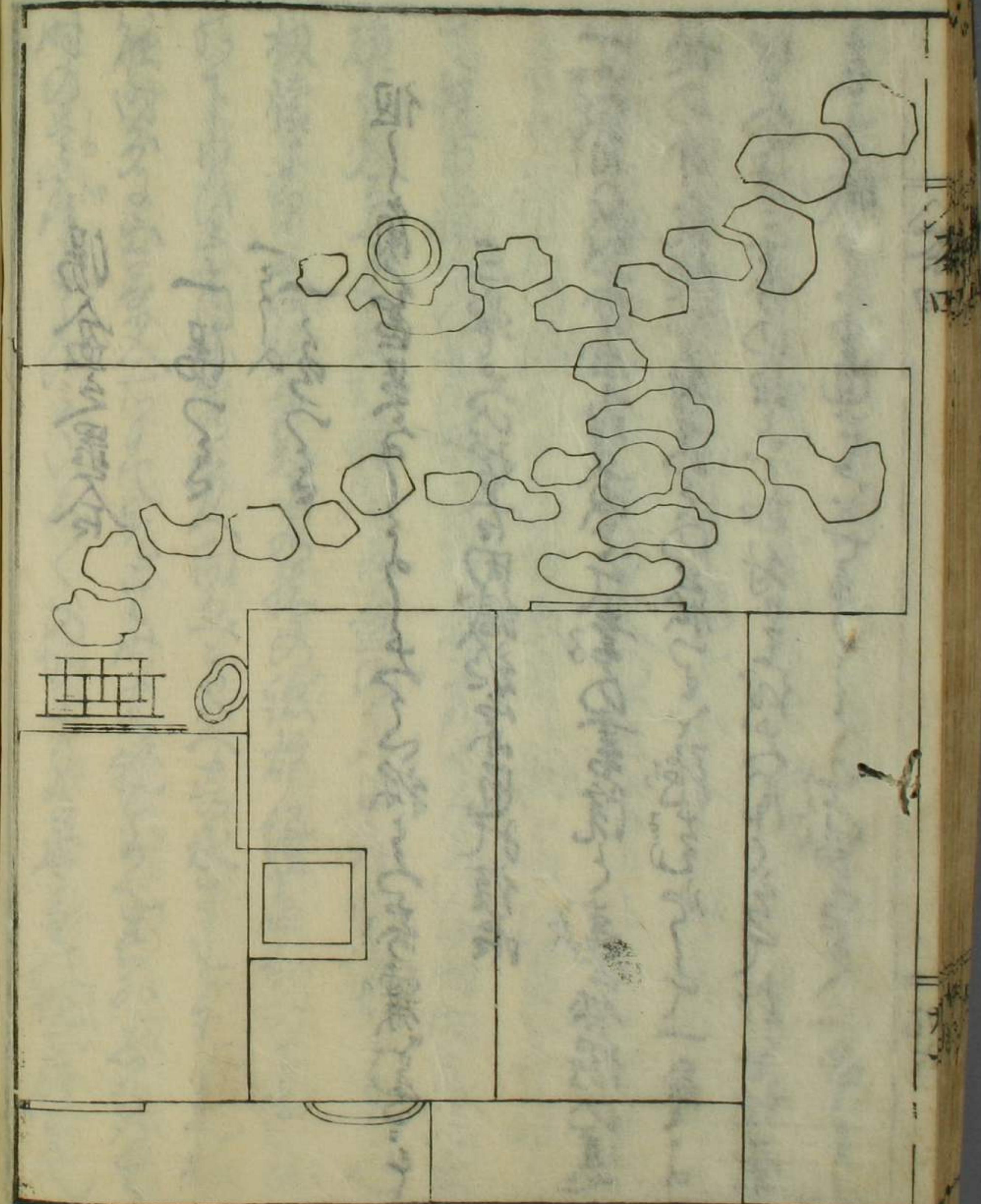
一大首の數ある事とて事の書院と遠處の遠
松のか永板とおととの紙つよと紙を以て一筆とよ
ほせす三事の筆とが付て紙と用くらて紙と切る
事と紙アと通じとせまへと付書を二事と

写入する分の大國とすを合メニ零大國くよ
是古國の化也

一考戰國の時、而してお家ミツルタツの後、和の下計合
内系ミツルと信す主ある歎戦と脱し、國へ入奉ると、搬參ハシナフ
五つ之三が在るを以て、もとせゆりて、往古帰アガハシへて、是
より外大國と称するものあり

一系の後、唐もが武の大國と見てをさし、舊々大國
非す後、唐もが武の後、唐もが武の後、唐もが武の後
唐もが武

一系や、たけうすと寺門スルダ、和小里もがれり
かよもがれり、水よもがれり、林よもがれり、雲の森モリを行もそ



心はけぬ事無く
身をすくねる風を先に
軽い身を抱き重く身を抱くが
かうづく

身をすくねる風を先に
軽い身を抱き重く身を抱くが
かうづく

案通全高尺之終

